



Osaka Mozart Ensemble
67. Konzert

Orchester
Konzertmeister

Osaka Mozart Ensemble
Masato Ohnishi

19:00 Uhr Samstag, 21. Juli 2018

Toyonaka Aqua Bunka Hall

《Programm》

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Ballettmusik zur Pantomime „Les petits riens“ KV Anh. 10 (299 b) (1778)

パントマイム『レ・プティ・リアン』のためのバレエ音楽 KV Anh. 10 (299 b)

Erster Auftritt

- I. Ouverture: Allegro <Mozart>
- II. No. 2 <nicht von Mozart>
- III. No. 3 <nicht von Mozart>
- IV. No. 4 <nicht von Mozart?>
- V. No. 5 Agité <nicht von Mozart?>
- VI. No. 1 <nicht von Mozart>
- VII. No. 6 Menuet <nicht von Mozart>
- VIII. No. 7 Largo - Presto - Largo <nicht von Mozart?>
- IX. No. 8 Vivo <nicht von Mozart?>
- X. No. 14 <nicht von Mozart?>

Zweiter Auftritt

- XI. No. 9 Andantino <Mozart>
- XII. No. 10 Allegro <Mozart>
- XIII. No. 11 Larghetto <Mozart>
- XIV. No. 12 Gavotte: Allegro <Mozart>

Dritter Auftritt

- XV. No. 13 Adagio <nicht von Mozart?>
- XVI. No. 15 Gavotte gracieuse <Mozart>
- XVII. No. 20 Gigue <nicht von Mozart>
- XVIII. No. 16 Pantomime <Mozart>
- XIX. No. 17 Passepied <nicht von Mozart?>
- XX. No. 18 Gavotte <Mozart>
- XXI. No. 19 Andante <nicht von Mozart>
- XXII. No. 12 Gavotte: Allegro <Mozart>

..... 休憩 Pause

Konzert für Flöte, Harfe und Orchester C-Dur KV 299 (297c) (1778)

フルート、ハープと管弦楽のための協奏曲 八長調 KV 299 (297c)

- I. Allegro
- II. Andantino
- III. RONDEAU: Allegro

Sinfonie Nr. 31 D-Dur „Pariser Sinfonie“ <Erste Fassung> KV 297 (300a) (1778)

交響曲 第31番 二長調『パリ交響曲』 <第1版、オリジナル> KV 297 (300a)

- I. Allegro assai
 - II. Andantino
 - III. Allegro
-

《Einführung》

カンパニーでこぼこ Company DecoBoco バレエ

「誰にでも楽しめるバレエをしよう！」というバレエダンサー協塚力の呼びかけにより、2005年に旗揚げ以来毎年の上演。トップクラスのダンサーの出演、古典作品の根本を失わず、現代の感覚を盛り込んだオリジナルの演出、そしてバレエは単に舞踊ではなく“無声演劇”という本質を重視し、本格的な舞台でありながら親しみやすく、客席は笑いと涙、そして感動に包まれています。2017年は第15回公演を兵庫県立芸術文化センター大ホールにて『くるみ割り人形』を守山俊吾指揮の下、フルオーケストラで上演。大好評に終える。そして、今年2018年の第16回公演も引き続きフルオーケストラでの上演。東里いたみホールにて2日間の開催を満席に終える。



今中 亜莉沙
Arisa Imanaka
(街娘、村娘)



岡田 倅奈
Yukina Okada
(街娘、村娘)



中嶋 美晴
Miharu Nakajima
(羊、羊飼い)



協塚 力
Chikara Wakizuka
(キューピッド)



香西 秀哉
Hideya Kasai
(青年)



大谷 加奈 Kana Otani フルート

京都市出身。京都市立京都堀川音楽高校、京都市立芸術大学を経て、フランス地方立リユエイク＝マルメゾン音楽院ヴァルトゥオーゾ課程（最高課程）修了。第59回全日本学生音楽コンクール大阪大会高校の部第一位。京都市教育委員会より表彰状授与。第19回びわ湖国際フルートコンクール入選及び武者小路千家賞受賞。第20回同コンクール第二位。PMF2014（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）修了生。京都芸術祭音楽部門毎日新聞社賞受賞。これまで、白石孝子、虎谷朋子、大嶋義実、フィリップ・ピエルロ、ミッシェル・モラガスの各氏に師事。現在は全国各地でソロ、室内楽、オーケストラ客演で活動している。ドルチェ・ミュージック・アカデミー大阪講師。オフィシャルサイト kanaotani.com



山本 真帆 Maho Yamamoto ハープ

京都生まれ。2004年、第1回京都日仏ハープ塾入塾審査に最年少12歳で合格。2009年渡仏。パリ・エコール・ノルマル音楽院にて高等演奏ディプロムを取得。2012年度ディプロム取得試験では審査員特別賞を受賞。2012年、2014年、2016年、京都にてソロリサイタル開催。2014年、シドニーでの世界ハープ会議にて公開マスタークラスに出演。2016年9月、スペイン・アルパオルタ国際ハープワークショップの招聘によりレリダ市サンロレンツォ教会にてリサイタル開催。2017年7月、NHK-FM「リサイタル・ノヴァ」に出演。2018年2月、第9回フランス国際ハープコンクール・リモージュ Honneur 部門にて二等賞併せてインストゥルメンタリウム賞を受賞。これまで国内をはじめ、フランス、スペイン、リヒテンシュタイン等でソロ演奏を行う。山根ひろみ、三浦由美子、G・ロレンツィーニ、I・ペランの各氏に師事。2015年夏に帰国。現在ソロ、アンサンブル、オーケストラなどの演奏活動を行っている。

レ・プティ・リアン 配役

〔第一景〕 ～いたずら好きのキューピッド～

キューピッド



脇塚 力

街娘 A



今中 亜莉沙

街娘 B



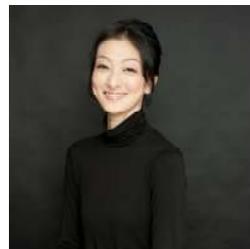
岡田 倅奈

青年



香西 秀哉

羊



中嶋 美晴

〔第二景〕 ～目隠し鬼～

青年



香西 秀哉

街娘 A



今中 亜莉沙

街娘 B



岡田 倅奈

〔第三景〕 ～村娘たちが惚れたのは？～

村娘 A



今中 亜莉沙

村娘 B



岡田 倅奈

魔法をかけられた羊飼い



中嶋 美晴

青年



香西 秀哉

キューピッド



脇塚 力

石澤整形外科 (医師：石澤 命仁)

診療科：整形外科、外科、リハビリテーション科、リウマチ科

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 (9時~12時)	○	○	○	○	○	○
午後 (5時~7時)	○	○	X	○	○	X

豊中市本町7-2-16
TEL：(06) 6852-3371
FAX：(06) 6852-3362

パリのモーツァルト

大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

1778年3月14日土曜日、22歳のモーツァルトはアロイジア・ヴェーバー嬢への想いを胸に、後ろ髪をひかれる思いでマンハイムを後にした。3月24日付のザルツブルクの父レーオポルトへの手紙で伝えている。

ぼくらは14日、土曜日に出発したわけですが、その前の木曜日の午後、カンナビヒ邸で演奏会があり、ぼくの3台のクラヴィアのための協奏曲が演奏されました。ローザ・カンナビヒ嬢が第一を、ヴェーバー嬢が第二を、そして（わが家の妖精）ピエロン・ゼーラリウス嬢が第三を弾きました。三回練習をして、とてもうまく行きました。ヴェーバー嬢はぼくのアリアを二曲歌いました。『牧人の王』から「穏やかな大気」と新しい曲『わしは知らぬ、どこからやってくるのか』でした。この最後の曲で、ぼくのいとしいヴェーバー嬢自身もぼくも、言葉には言いつくせないほどの名誉を受けました。みんなは、こんなに感動したアリアを聴いたことがないと言っていました、彼女もまた申しぶんなくそれを歌いました。カンナビヒはアリアが終わるや、「ブラヴォー、ブラヴィッシモ、マエストロ。まさに大家の作品だ」と声高に叫びました。ぼくも当地で初めてこの曲を器楽の伴奏で聴きました。あんなに正確に、趣味よく、強弱を守って演奏され、歌われたのを、あなたにも聴いてもらいたいと思いました。・・・（中略）・・・ヴェーバー嬢は、ぼくへの思い出と、ささやかな感謝のしるしとして、二対のレース編みの袖飾りを心を込めて編んでくれました。

モーツァルトは、3月23日の午後4時、母親マリア・アンナとパリに到着した。彼女はこの手紙の追伸で、「9日半にわたる旅の最後の2日間は、風で息がつまりそうになり、二人とも馬車の中で洗濯物みたいにずぶ濡れになってしまいました。」と述べている。それでもモーツァルトは、パリで新たな活路を見出すべく、精力的に動き回った。24日にはグリム男爵とフルート奏者のヨハン・バプティスト・ヴェンドリングを、翌25日には、マンハイム宮廷楽団のコンツェルトマイスター・カンナビヒ、およびマンハイムの外交官ゲミンゲンの紹介状を携えてプファルツ選帝侯国の大臣フォン・ジッキンゲン伯爵（パリ在中バイエルン大使）を訪ねている。プファルツ選帝侯カール・テオドールの庇護のもと、ヨーロッパ各地から名手が集められたマンハイム宮廷楽団は、当時最もレベルの高いオーケストラであった。楽団員のヴェンドリングは、オーボエ奏者のフリードリヒ・ラムとともにモーツァルトより先にパリに来ていて、彼のことを大いに宣伝してくれていたのだ。レーオポルトは、旧知の作家、グリム男爵に手紙を2通書き、息子がパリで活動できるよう、援助を求めている。1763年11月18日から1764年4月10日までモーツァルト一家がパリに滞在した際、グリム男爵に彼が主宰する『文芸、哲学、批評通信、ドイツ最高権者宛て（文芸通信）』の中で、まだ7歳にもならないモーツァルトの数々の驚くべきエピソードを紹介してもらっていた。彼は、文芸通信に「私がこの子供のすることを何度も聞いていたら頭が変になってしまうのではないかということも否定できない。奇跡を見たら狂気になるのを防ぐことはむずかしい、というのわかるような気がする・・・。」とまで述べ、ヨーロッパ各地の王侯の宮廷がこの神童の出現を知るようになった。レーオポルトは再度それをグリム男爵に期待したのだった。グリム男爵が、1778年2月21日、レーオポルトに宛てた手紙が残っている。

今日か明日かと会える日を待っております。会えれば私が彼のために何がしてあげられるかわかると思うのですが。彼はヴェンドリングのように彼に必要な仕事をしてくれる信頼できる人の手の中にありますが、だれも本当の父親の代わりはできません。・・・今仕事と書類に埋もれています。それで通信もうまく行きません。しかし息子さんがこちらにいらっしゃれば私の秘書になっていただくのですが。あなたがもうご心配ないようにして差し上げられるのですが。息子さんは非常に思慮のある方ですからパリの危険を恐れていらっしゃらない筈はありません。もし彼に自由主義的な傾向があれば間違いなく危険な目に遇うでしょう。

フリードリヒ・メルヒオール・グリムは、1772年にザクセン＝ゴータ大公のパリ宮廷での代理公使に任命され、ヴィーン宮廷から神聖ローマ帝国の男爵の称号を受けていた。4月5日、マリア・アンナは夫レーオポルトに宛てた手紙の中で、物価の高いパリでの困難な暮らしぶりを伝えている。

私たちの持ち金は、でも、もうかなり乏しくなっしまい、そんなにうまくは行っていません。・・・（中略）・・・一日じゅう、ひとりつきりで部屋のなかに坐っていますが、まるで牢屋にでも入れられているみたいです。おまけにとっても暗くて、小さな中庭に面しているだけなので、一日じゅうお日さまが見られませんし、お天気がどうなのかわかりません。わずかに差し込んでくる光で、やっとの思いでなにかちょっとしたものを編むことができますのです。こんな部屋に私たちは月に 30 リーヴルも払わなくちゃいけないのです。

1リーヴル = 500円とすると家賃は1万5千円。食事もワインも高くてまずく、断食日は手紙では書きつくせないほどとても辛抱できない、と訴えている。モーツァルトは、クラヴィーアが借りられるジョゼフ・ルグロ（コンセール・スピリチュエルの支配人）宅で『ホルツバウアーのミゼレーレに付した八つの楽曲KV Anh. 1 (297a)』（消失）や、フルートのヴェンドリング、オーボエのラム、ヴァルトホルンのブント、ファゴットのリッターのために『サンフォニー・コンセルタント〔協奏交響曲〕KV Anh. 9 (297B)』（消失）を作曲していた。『アレクサンドルとロクサーヌ』という題の全二幕のオペラも作曲することになっていた。母親の手紙によると、息子は、ルグロのところではほとんどいつも食事をとり、舞踊家のジャン・ジョルジュ・ノヴェールや著名な女流作家ルイズ・フロランス・ペトロニル・タルディュー・デスクラヴェル・デピネー夫人のところでも毎日食事をしているとある。モーツァルトはこの手紙の追伸で、当時フランスの代表的作曲家フランソワ・ジョゼフ・ゴセックから高い評価を受けていたにもかかわらず、パリの音楽界を痛烈に批判している。

たったいま、ぼくはコンセール・スピリチュエルから戻ったところです。グリム男爵とぼくは、当地の音楽についてしばしば音楽的怒りをぶちまけました。ただし注意——これはぼくらだけの内緒ですよ。だって、会場では「ブラヴォー、ブラヴィッシモ！」と叫び、手が痛くなるほど拍手をしましたからね。・・・（中略）・・・フランスの女性歌手がイタリアのアリアを歌うのだけは聴きたくありません。フランスの駄作をがなりたてるならまだしも、よい音楽を台なしにするなんて！——堪えがたいことです。

それに対して父親は、すべてお見通しでモーツァルトの手紙を受け取る前の4月6日付の手紙で、万事につけてグリム男爵に相談し、自分勝手な頭で、偏見を持った妄想で行動しないこと、パリでの暮らしぶりはドイツのそれとはまったく違うので、フランス語で作法に適ったかたちで喋り、引き立ててもらおう努力をするよう、伝えている。さらに4月13日に書かれた手紙では、オペラではフランス人たちの趣味に従うよう、彼らのオペラ、それも彼らにとりわけ人気が高いものをひたすら聴いて、本物のフランス人になることを求めている。しかし、モーツァルトにとってつらい事件が立て続けに起きる。5月1日付の父への手紙によると、「ド・シャボ侯爵夫人の邸で氷のように冷たい、暖炉もない大きな部屋で長い間待たされた後に、調律がされていない、見るも哀れなおんぼろなクラヴィーアを冷たくなった指で弾かされたが、夫人はおろか、居合わせた紳士たちもデッサンの手を休めず、モーツァルトは椅子やテーブルや壁を相手に演奏しなければならなかった。」と記している。また、コンセール・スピリチュエルでは、ホルツバウアーの『ミゼレーレ』はとにかく長くて人気がなかったために、モーツァルトが作曲した4つの合唱曲のうち2つしか演奏されず、しかも最上の曲がカットされた。さらに、大急ぎで作曲したサンフォニー・コンセルタントは、写譜をするためにルグロに総譜を渡したにもかかわらず、演奏されるはずの日に突然キャンセルになった。オーボエのラムとホルンのブントは、かんかんに怒って、ラムは音楽室でルグロのことを「彼のやり方はきれいじゃない」と罵倒していたが、モーツァルトも事情がまったくわからなかった。一つ思い当たることがあるとすれば、ルグロの家で、イタリア人のマエストロ・カンビーニを打ちのめしてしまったことであった。モーツァルトにはそんな気は全くなかったが、彼のとてもきれいな四重奏曲をマンハイムで聴いたことがあったので、その曲をほめ、初めのところを彼に弾いて差し上げたところ、その場にいたラムとブント、ファゴットのリッターが調子に乗ってモーツァルトの覚えていないところも自分で作曲して演奏を続けるように言ったことが、災いしたのであった。彼は、原曲より素晴らしい曲にして弾いてしまったのである。そして、父への手紙は次のように続く。

もしここが、聴く耳をもち、感じる心があり、少しでも音楽を理解し、趣味をもつひとたちがいる所ならば、ぼくはこんなことはすべて心から笑ってすませたでしょう。ところが、ぼくは（こと音楽に関するかぎり）けだものや畜生同然の連中のなかにいます。どうしてほかの態度がとれるでしょう。彼らは行動、欲望、激情のあらゆる点において、みんな一様です。——世界中で、パリがみたいな所はありません。ここの音楽をこんなに語ったからといって、ぼくが勝手なことを言っていると思わないでください。誰にでも——フランス生まれのひとでないかぎり——聞いてみてください。——そのひとが（信頼できるひとならば）同じことを言うでしょう。

それに対して、父は5月11日に書いた手紙で諭す。

愛するヴォルフガングよ！いま私は万事について答えようと思います。パリでは百回も無駄足を踏まなくてはならないことは、私は経験から知っているし、またこうしたことはもう前もって一度おまえに書きもしたことです。フランス人たちがお世辞で支払いをするのは私も知っています。それにお前がいたところで敵を持つだろうことは避けがたい事態であって、大いなる才能の持ち主はすべてそうです。いまパリで名望があり、巢に籠っている者はすべて、巢から追い出されることは望んでいないし、自分たちの名声が損なわれるのを心配しています。・・・（中略）・・・おまけにおまえは自分を妬む者たちに意気消沈させられ、狼狽させられてはなりません。どこの土地だってそうです。イタリアだけでも思い出してごらん、おまえの最初のオペラ、三番目のオペラ、デットーレのことなど、デ・アミーチスの陰謀のことなども思い出してごらん。どうにか切り抜ける必要があります。・・・（中略）・・・機嫌をよくし、境遇に順応しなさい。それに、オペラを一曲書かねばならないとおまえは私に手紙で書いてきたのだから、私の忠告に従い、お前の名声のすべてが第一作にかかっているのを考えなさい。作曲する前に、聴いて、フランス国民の趣味をじっくりと考えてみるのです。彼らのオペラを聴くか、じっくりと観るのです。私はおまえのことをよく知っています。おまえはなんでも模倣できます。急いで作曲しないこと。——これは分別のある者のすることではありません。グリム男爵様とノヴェールと、歌詞を前もってじっくり検討しなさい。スケッチを作り、それを彼らに聴かせなさい。誰でもそうします。ヴォルテールは友人たちの前で自分の詩を読み、彼らの判断を聞き、そして直します。

この手紙には、アウアー家のザンドゥルがまるで気が触れたようになったため、バリザー二博士の指示で足の瀉血が行われたことが記されており、追伸で「愛する妻よ、瀉血を忘れないように。おまえは自分の家にいるのじゃないことを考えなさい。」と伝えている。妻マリーア・アンナは、5月29日付の手紙で、「瀉血は忘れないようにします。まず、腕の良い理髪師に会う必要があります。ここでは、瀉血はもう昔のように行われていませんが、どの流行も変わってゆくようなものです。」と答えている。瀉血とは、古代ギリシャ時代から行われている、患者から悪血を抜く療法で、様々な疾患に適用されてきた。現代でも、慢性C型肝炎や多血症などに有効性が確認されている。この時の手紙に、モーツァルトは父親の「ヴァイオリン教程」フランス語訳版が売られていることを報告している。

フルート、ハーブと管弦楽のための協奏曲 八長調 KV 299 (297c)

5月14日、モーツァルトの母マリーア・アンナからザルツブルクの夫レーオポルトに宛てた手紙でモーツァルトが王妃マリー・アントワネットのお気に入りです謝礼を多く支払ってくれるド・ギーヌ公爵の令嬢に毎日2時間作曲を教えていることを伝えている。モーツァルトもその手紙の追伸で、「公爵はたぐいえないフルートの名手で、令嬢はハーブを見事に弾く。彼女はとても才能に恵まれ、天分があって、ことに抜群の記憶力で200曲にのぼるレパートリーを全部暗譜で弾くことができる。」と述べている。公爵は、娘にオペラやアリア、協奏曲や交響曲を作曲させようというのではなく、彼女と自分の楽器のための大ソナタを書けるようになってほしいと願っている。しかし、モーツァルトは、彼女には楽想を生み出す力はないと断言している。これに対する5月28日付の父からの返事が興味深い。

「きょう、4回目のレッスンを大公のお嬢さんにしました」とおまえは書いています。それに、彼女がもう自分で楽想を書きつけるべきだとおまえは望んでいる。——おまえはみんながおまえと同じ天分を持っているものと考えているのかね？——天分なんてすぐ出てくるだろうって！その子は記憶力がよ



マリー・アントワネット (1777年)

い。けっこうだ！それを盗ませる——それとももっと上品に言えば、応用させるのがいいのだ。——最初はなんにもならない。勇気が湧くまでは。変奏曲ではおまえはいいやり方をやりました。続けさえすればよいのです！

アドリアン・ルイ・ボニエール・ド・スアストル・ド・ギーヌ公爵は、ベルリンやロンドンでフランス大使を務めた外交官で、モーツァルトはパリに着いて間もないころにグリム男爵から紹介された。4月5日までに、公爵はモーツァルトに対し協奏曲を二曲、一曲はフラウト・トラヴェルソ用に、もう一曲はハープ用に作曲を依頼している。しかし、実際に作曲されたのは、フルートとハープのための協奏曲一曲であった。現存する自筆譜には作曲した日付が書かれていないが、7月31日付の父宛ての手紙に4か月前に作曲した『フルートとハープのための協奏曲』の代金がド・ギーヌ公爵から支払われていないと述べられていることから、4月上旬には作曲されていたものと考えられている。この侯爵は品格に乏しい人だったようで、フランス大使としてロンドンに赴任中、贈収賄と投機の疑いでフランスに呼び戻されているのだ。この手紙によると、モーツァルトは、娘のレッスン代を受け取りに公爵邸に赴いたが、家政婦は半額に値切ろうとしたので受け取らなかったという。また、9月11日の時点でも、協奏曲の代金はまだ支払われていないことが、父への手紙に記されている。

5月14日付の父への手紙の中で、モーツァルトはヴァルトホルンとヴァイオリン奏者で作曲家のヨハン・ヨーゼフ・ルードルフからヴェルサイユのオルガン奏者の職を世話してもらったことを伝えている。年収2000リーヴル（100万円）で6か月だけヴェルサイユで暮らせばよいという条件にかかわらず、彼は、難癖をつけて断ろうとしていた。これに対して父親は、こう諭す。

おまえはそれをすぐに断ってしまってもはいけません。半年で 83 ルイ・ドールが稼げるってこと、——おまえには残りの半年は別の収入があげられるよう残されているってことを、じっくり考えてみなくてははいけません。——たぶんそれは定職なのだから、病気ででも丈夫でもいいのだろう。おまえはこの職をいつでも辞めることができます。宮廷にいるのだから、つまり毎日国王や王妃のお目にとまるのだから、それによっておまえの幸福にいつそう近づけるのだ。——二人の楽長のうち一方でも辞めでもしたら、お前はその地位を得ることもできる。——いずれのちに、王位継承でもあれば、おまえは王子のクラヴィーア教師にでもなれるだろう。これは、大いに収入があるはずだ。おまえが劇場やコンセル・スピリチュエルなどのためになにか書き、楽譜を版刻させ、それをお偉がたに献呈するのを妨げる者は誰もおるまい。ヴェルサイユには、多くの大臣たちが、少なくとも夏には滞在しているのだから。——ヴェルサイユそのものが小さな都会だし、あるいは少なくともたくさんの有名な住人がいるのだから、場合によっては一人二人弟子を取れるだろう。——それに結局はそれが王妃のお引き立てを頂戴し、また好きになっていただく一番確実な道なのです。この手紙をフォン・グリム男爵に読んで差し上げ、彼の意見を伺いなさい。

モーツァルトは7月3日付の手紙で、こう反論する。

ヴェルサイユの件は、ぼくの考えではありませんでした。——グリム男爵やほかの親友たちに相談しました。——みんなぼくと同じ考えでした。お金は少ないし、ほかに稼ぎようのない所に 6 か月もあくびをかみ殺して、あたら才能を埋もらせなくてはなりません。王に仕える者なんて、パリでは忘れ去られてしまいますからね。しかもオルガニストですよ！——いい職ならば大いに歓迎ですが、楽長でなくてはごめんですし、いい給料でなくてはね。

パントマイム『レ・プティ・リアン』のためのバレエ音楽 KV Anh. 10 (299b)

7月9日付の父への手紙にノヴェールのバレエ・パントマイム『レ・プティ・リアン（ささいなもの）』のために書いた音楽のことが述べられている。

ノヴェールのバレエに関しては、彼がおそらく新作を作るだろうということだけをお知らせしました。——彼はちょうどバレエの半分をほしがっていたので、ぼくがその音楽を書きました。——つまり 6 曲は他の作曲家によって書かれたもので、それは古くさい、みじ

めなフランスの歌からできています。ジンフォニー（序曲）とコントルダンス全 12 曲は、ぼくが書きました。——このバレエはもう 4 回も上演されて、大好評を博しました。——しかし、ぼくは今では、あらかじめ謝礼がどのくらいかわからないときは、絶対に何も書かないつもりです。——今回ののは、まったくノヴェールへの友情の結果にほかなりません。——

6月11日、パリ・オペラ座で上演されたニコラ・ヴィート・ピッチニの2幕のオペラ『La finte gemelle（偽の双子姉妹）』に使用された。その後、6月20、25日、7月2日、5日、7日にも上演され、7月13日にはアンフォッシの『不謹慎なものの好き』公演時にも上演された。このバレエはすでに1768年1月5日にヴィーンの宮廷劇場で上演されている。その時の音楽はフランツ・アスペルマイヤーによるものだった。このバレエをパリで再演するにあたって、ノヴェールはモーツァルトに新たに作曲を依頼したのであった。

ここでバレエの歴史とノヴェールのことを述べておこう。舞踊の起源は古いが、劇的な性格をもつバレエが起こったのは中世イタリアである。1400年に歴史上はじめての振付師であるドメニコ・ダ・ピアチェンツァが著した「舞踊術と振付法について」と題する論文の中で音楽との調和、表現を議論している。1533年、ヴァロワ朝第9代のフランス王フランソワ1世の息子、後のアンリ2世とフィレンツェの名門メディチ家のカテリーナ・ディ・ロレンツォ・デ・メディチ（フランス名：カトリーヌ・ド・メディシス）との結婚によりイタリアのこの舞踊芸術はフランスに一層浸透することになった。ルイ14世は1651年に「カサンドルのバレエ」で初舞台を踏み、生涯にわたってバレエに寵愛を注ぎ、1661年には王立舞踊アカデミーを設立して宮廷バレエの全盛期を迎えた。ジャン＝バティスト・リュリが王室バレエの作曲家に任命されたのはこの頃である。当時のバレエの振付けはアントレ（entrée）とグラン・バレエ（フィナーレともいう）からなり、アントレはパントマイムが多く使用され、より演劇的な構成を持つ舞踊劇（Dance d'action）になっていたのに対して、フィナーレは物語的な意味を全く持たない単なる舞踊作品であった。1670年にルイ14世が舞台を去った後に、1671年に王立音楽アカデミー（後のパリ・オペラ座）が、1713年にはそのオペラ座舞踊学校が設立され、貧困家庭の9歳から13歳の少年少女が月謝免除で育て上げられた。かつてシャルル12世のもとで軍隊の副官を勤めていた父を持つジャン＝ジョルジュ・ノヴェール（1727-1810）は、小さいうちから舞踊神ルイ・デュプレに預けられ、1742年、フォンテーヌブローでルイ15世の御前で初舞台を踏んだ。彼は、1747年にオペラ・コミック座のメートル・ド・バレエ（maître de balletは、バレエの制作と舞踊手の技術訓練にあたる責任者）に就任している。ロンドンで「舞踊のシェークスピア」と絶賛されたノヴェールは、単なる舞踊家ではなく、思想家であった。1758年にアカデミー・ド・リヨンのメートル・ド・バレエとなり、バレエの改革に取り組んだ。彼は、バレエ・ダクシオン（Ballet d'action）を考案し、踊り手の衣装を改革し、ドラマの曲面や感情にあった音楽を作曲家に書かせた。1760年、彼は、ヴェルテンベルク公に招かれてシュトゥットガルトに赴き、歴史に残る名著、『舞踊とバレエについての手紙』をヴェルテンベルク公に献呈した。1767年、ノヴェールはヴィーンに行き、1767年3月26日に『レ・プティ・リアン』をブルク劇場で上演した。その時の音楽は、アズブルマイヤーが担当したことは前述した通りである。この上演の批評が残っている。

あらゆる物腰、身振り、局面、要するに、あらゆるアントレは一体となり、かのコレジオさえそれ以上生き生きと自然にすることは不可能なほどの、一連の絵を成している。ノヴェールはこのバレエの題名『レ・プティ・リアン』をとても気に入っていたが、まさにこれらほんのささやかなものが、彼に名誉をもたらし、ヨーロッパにおける最初のメートル・ド・バレエとしての名を、正当にして与えたのである。

ノヴェールは、メートル・ド・バレエと宮廷の催し物監督に加えて、マリーア・テレジア女帝および帝室の舞踊教師に任命された。マリーア・テレジア女帝の娘マリーア・アントニア（後のマリー・アントワネット）に舞踊を教えたのもノヴェールであった。ヴィーンで暮らした1774年までの8年間で50作以上のバレエ作品を上演している。モーツァルト一家は、1767年9月15日から10月23日、1768年1月10日から12月末までヴィーンに滞在していた。モーツァルト一家がヴィーンに滞在中の1768年9月11日に、ノヴェールの娘でピアニストのヴィクトワール（1749-1812）が裕福な商人ヨーゼフ・ジュナミと結婚している。ヴィーンのシュテファン大聖堂で行われた結婚式では、レーオポルト・モーツァルトの友人で劇作家のフランツ・ホイフェルトが立会人として参加した。従って、モーツァルト一家がヴィーンに滞在した折に、ノヴェール一家と知り合いになった可能性は高い。1767年9月29日にレーオポルト・モーツァルトからザルツブルクのハーゲナウアーに送られた手紙が残っている。

ハッセのオペラは見事です、歌手たちはこうした祝祭の催し物のためにはちっとも特別なところがありません。…（中略）…でも踊りは第一級で、その主役は有名なフランス人のヴェストリスです。

1771年、ノヴェールはマリー・ア・テレージア女帝の命を受け、四男フェルディナンド大公とモデナのベアトリス王女の婚儀のためミラーノに赴いている。モーツァルトもまた、女帝から劇的セレナータ『アルバのアスカーニョ』の作曲を委嘱され、父とともにミラーノに来ていた。10月15日に大聖堂で婚礼が行われ、16日にはハッセの『ルッジェーロ』が、そして17日には『アルバのアスカーニョ』が上演されている。このオペラにはバレエがあり、9月13日にレーオポルトがザルツブルクの妻に宛てた手紙に、次のように記載されている。

今日、私たちはバレエの練習を見ましたが、ふたりの主役舞踊手ピックとファヴィエが熱心なのにびっくりしました。最初の演技はヴィーナスで、女神は精霊たち、三美神たちに付き添われて雲上から降りてくるのです。シンフォニア〔序曲〕のアンダンテは早くも11人の女性舞踊手によって踊られます。つまり精霊たちが8人に三美神、あるいは美神8人と3人の女神たちです。シンフォニアの最後のアレグロは、32人の合唱隊員、つまりソプラノ8人、コントラルト8人、テノール8人、それにバス8人の合唱で、同時に16人、つまり女性8人と男性8人で踊られます。…（中略）…最後の場では、全員、つまり精霊たち、三美神たち、羊飼いたち、羊飼いの乙女たち、男女の合唱隊員と踊り手たちが全員集まり、彼らは全員で最終合唱を踊ります。ここにはソロの踊り手たちは含まれていませんが、ピック氏、ビネッティ夫人、ファヴィエ氏、それにブラシュ嬢です。

シャルル・ル・ピック（1749-1806）は、ノヴェールの弟子で、師に同行してイタリア、ドイツ、フランス、イギリスを遍歴し、ノヴェールは彼を「天使のような気品がある」と評している。ビネッティ・アンナ・ロマーニは、ル・ピックの妻で、ジャン・ファヴィエもル・ピックの仲間なので、モーツァルトのセレナータにあるバレエの振り付けはノヴェールが行ったものではないかと思われる。モーツァルト父子は、1773年7月15日から9月25日にもヴィーンを訪れている。そこでもノヴェールと会い、1773年8月28日にヴィーンのレーオポルトからザルツブルクの妻に宛てた手紙に「明日はノヴェールさんのところで食事をします。」と親密な様子を記している。1777年1月、ザルツブルクを訪れたノヴェールの娘、ヴィクトワール（ジュナミ夫人）のためにモーツァルトが作曲したピアノ協奏曲が、第9番変ホ長調KV 271である。この曲はジュノム嬢のために書かれたとして《Jeune homme、ジュノム》と親しまれている協奏曲であるが、ジュノム嬢なる人物が長い間不明であった。2003年に、jeune homme（若い男）嬢ではなく、ジュナミ夫人のために書かれたことが判明したので、そろそろ《ジュナミ》と正しく呼ばれてほしい。

ノヴェールは、1775年にかつての弟子であり、今やルイ16世の王妃であるマリー・アントワネットからの強い要望で、ガエターノ・ヴェストリスの後任として、王立音楽アカデミー主席メートル・ド・バレエに就任した。本来なら、ヴェストリスの補佐役であったマクシミリアン・ガルデルが昇格するはずであったが、マリー・アントワネットはノヴェールをその職に就かせるためにガルデルを罷免してしまったのである。彼女はノヴェールに高額報酬と家族にも特権を与え、ヴェルサイユ宮殿の離宮プチ・トリアノンの催し物監督にも任命した。オーストリアからフランスに嫁いだマリー・アントワネットは孤独だったのである。兄ヨーゼフの結婚祝賀で1765年1月24日にシェンブルン宮殿でバレエ『愛の勝利』を踊る自分の姿（右端）が描かれた絵画は、大変なお気に入りであり、1778年、プチ・トリアノン用にこの複製を注文させたほどである。王妃はたびたびパリ・オペラ座までお忍びで出かけて行って仮面舞踏会を楽しんでいたようで、1777年5月29日付で兄ヨーゼフ2世からそれを咎める手紙が送られている。モーツァルトがパリを訪れた1778年3月から9月の間に、かつて彼が6歳の時にシェンブルン宮殿でプロポーズした王妃に謁見する機会があったのであろうか。マリー・アントワネットは、1770年



マリー・アントワネット（1765年）

に皇太子（のちのルイ16世）と結婚してから子宝に恵まれなかった。1777年に兄の神聖ローマ帝国皇帝ヨーゼフ2世がパリを訪れた折に、ルイ16世に包茎手術をすすめたのであった。それが功を奏し、マリー・アントワネットは、1778年の夏のある日、ルイ16世に憤然とした表情で訴えることになったのである。「陛下、ある臣下のことで文句を申し上げに参りました。その者は無礼にも、私のおなかを足で蹴ったのでございます。」王妃はその年の12月19日午前11時半に第1子を出産した。モーツァルトがパリに滞在していた時、王妃はちょうど懐妊中だったのである。

『レ・プティ・リアン』の音楽は、1872年、ヴィクトル・ヴィルデールによりオペラ座の古文書からノヴェールの作品として発見された。モーツァルトがまったくノヴェールへの友情の結果と述べていることから、ミハエル・ハイドンのために二重奏曲を書いたようにゴーストライターとして働いたのであろう。実際、モーツァルトが作曲したことは新聞記事にも出ていない。これらは全21曲から成り、モーツァルトが手紙で述べている、自身が作曲したジフオーネ（序曲）とコントルダンス12曲、他の作曲家が作曲した6曲の合計19曲と食い違いがある。その後の再演で追加されたのかもしれない。1886年にヴィルデールが編者になり旧モーツァルト全集の第24篇（補遺）にモーツァルトの作品として組み入れたのは、序曲と、第7曲から第19曲の14曲のみである。一方、1963年の新モーツァルト全集では、第2篇（劇場作品）第6集（演劇、パントマイムおよびバレエのための音楽）に全21曲を組み入れたが、モーツァルトの作品と推定されているのは、序曲と第9曲から第12曲、第15曲、第16曲、第18曲の8曲である。一方、モーツァルトの作品ではないと推定されたのは、第1曲から第3曲、第6曲、第19曲、第20曲の6曲。モーツァルトの作品ではないかもしれないと推定されたのは、第4曲、第5曲、第7曲、第8曲、第13曲、第14曲、第17曲の7曲である。モーツァルトの自筆譜が現存しないため、様式だけでの判断になっているが、新モーツァルト全集がモーツァルトの作品と推定した曲は8曲にとどまり、モーツァルトは、ジフオーネ（序曲）とコントルダンス12曲を作曲したと手紙で伝えているので、モーツァルトの曲と推定されなかった曲のうち、5曲はモーツァルトの手になる可能性が高い。ちなみに、第20曲ホ長調で使われているクラリネットは珍しいH管になっており、へ長で書かれている。このバレエがパリで初演された翌日、6月12日付の『パリ新聞』に批評が掲載されている。

この作品は、挿話的で、ほとんど一つ一つがおたがいに別々の、三つの情景から成っている。第一景はまったくアナクレオン風である。つまり、キューピッドが網にかかり、檻に入れられるというもの。その構成はまことに快い。ギマール嬢とヴェストリス（息子）がこの上なく優雅に踊り、主題をたくみに表現した。第二景はコラン＝マイヤールの劇であった。ドーベルヴァル氏は公衆にとってまことに心地よい才能の持主であるが、主役を演じている。第三景はキューピッドのいたずらで、彼は二人の羊飼い娘に羊飼いに扮したもう一人の羊飼いを紹介する。アスラン嬢が羊飼い役を演じ、ギマール嬢とアラール嬢が羊飼い娘たちの役を演じる。二人の羊飼い娘は偽の羊飼いに恋をしてしまうが、誤りに気づかせようと、偽の羊飼いは彼女たちに自分の胸を見せてしまう。この情景は、この三人の名高い踊り手たちの勘と優美さで、まことに刺激的である。アスラン嬢が二人の羊飼いたちの迷いを覚ますとき、多くの声が《アンコール》と叫んだのを注目すべきである。それによって、このバレエを閉じる多様なフィギュアは大いに喝采を受けた。

残念ながら、台本は現存していないため、どんなシーンでどの音楽が使用されたのか、全く不明である。『パリ新聞』に書かれたこの論評が唯一の手がかりなのだ。また、6月3日のグリム男爵の『文芸通信』に、「・・・『偽の双子姉妹』の後、ノヴェール氏の新しいバレエ『レ・プティ・リアン』が上演され・・・」という記載があることから、幕間に演じられたのではなく、オペラが終了した後に上演されたことがわかっている。今回の演奏会ではバレエと共演するにあたり、新聞の論評からストーリーを推測することにした。初演時の配役はキューピッドがヴェストリス（息子）、羊飼い娘がギマール嬢とアラール嬢、偽の羊飼いがアスラン嬢、コラン＝マイヤールの劇の主役がドーベルヴァル氏である。キューピッドは、ローマ神話でヴィーナスの子、愛の神クペードである。ギリシャ神話ではエロスに当たる。キューピッドの矢が当たると恋心を起こす。この効果は絶大なので、キューピッドはしばしばいたずらをした。第三景で、キューピッドが羊飼いの娘が男性の姿をした羊飼いの娘に恋をさせるいたずらをしている。そこで、第一景では、「キューピッドが網にかかり檻に入れられる」とあることから、いたずら好きのキューピッドを描き、最後に彼を懲らしめようと網をつかって捕まえることにした。全くアナクレオン風とあるが、これは、紀元前570年頃生まれの古代ギリシャの抒情詩人アナクレオンの恋愛感情や酒をテーマにした作風。第二景は、コラン＝マイヤールの劇とある。これは、目隠し鬼ごっこである。本日の演奏では、ストーリーの内容に合わせて、また調性を考慮して曲順を変更している。

羊飼娘を演じたマリー・マドレーヌ・ギマル（1743-1816）は、8世紀のスカンダルの多いバレエの権化と評され、絶えずノヴェールと喧嘩をしていたが、信頼されていた。小柄でやせており、才気があって気品がある彼女は、アナクレオン風なバレエのあどけない役に向いていた。一方、マリー・アラール（1742-1802）は、並外れてがっしりしており、驚くほどの活発さで踊る、波乱万丈の生涯をおくったダンスズであった。彼女は、キューピッド役のダンスール・ノーブル、オーギュスト・ヴェストリス（1760-1842）の母親で、ガエターノ・ヴェストリス（1729-1808）の愛人であった。ガエターノ・ヴェストリスはレイ15世時代の舞踊神レイ・デュブレの弟子。ヴェストリス親子は二代目と三代目の舞踊神を名乗った。ダンスール・ノーブルになれる舞踊家は、並外れてプロポーションの良い肉体と調和のとれた所作が必要とされた。オーギュストは、父親の優雅さと母親の刺激的な情熱を合わせ持っていた。第二景でコラン＝マイヤールの劇の主演を演じたジャン・ベルシエ・ドゥヴェルバル（1742-1806）は、ノヴェールの弟子で趣味と知性に恵まれたダンスールだった。彼は急に太りだしたのでダンスール・ノーブルを断念し、ポルドーのオペラ座で1791年までメートル・ド・バレエを務めた。彼の優れたバレエ作品『ラ・フィーユ・マル・ガルデ』は、1786年以来、現在でも演じられている。

交響曲 第31番 二長調 『パリ交響曲』 KV 297 (300a)

パリに到着した翌々日、モーツァルトはプファルツ選帝侯国の大臣フォン・ジッキンゲン伯爵を訪ねたと先に述べた。6月12日にモーツァルトの母マリア・アンナからザルツブルクの夫レーオポルトに宛てた手紙の追伸で、モーツァルトは、テノール歌手のアントン・ラーフと伯爵邸でご馳走になったことを報告している。

伯爵に（もう、ずっと前から）頼まれていたので、いくつかのぼくの作品を持って行きました。きょうは、ちょうど書き上げた、コンセル・スピリチュエルの聖体の祝日の日の幕開けに演奏される新しいシンフォニーを持参しました。これは完全に二人の気に入りました。ぼくはそれでとても満足しています。でも、みんなに受けるかどうかわかりません。——それに、実をいえば、そんなことはたいしたことではありません。いったい、これが誰の気に入らないのでしょうか？——少数にせよ、その会場に賢明なフランス人が居合わせれば、これが気に入ることは間違いないと請け合います。間抜けな連中に——たとえ気に入られなくても、たいした不幸じゃありません。——でもぼくは、それでも、ロバどももこのなかに何かお気に入りのものを見出すにちがいないと期待しています。それに、例のトゥッティのユニゾンで始まる《最初の弓の当たり》もちゃんと忘れずに入れておきましたよ！——これでもう充分です。当地ののろまどもが、どんなに騒ぎ立てることか！——ばかばかしい！ぼくにはなんの違いも見当たらないのに。彼らだって、他の地方と同じように、トゥッティで一斉に始めているのです。これは実に滑稽です。

この手紙から6月12日までに『パリ交響曲』は完成していたことがわかる。これに対して、レーオポルトは、6月29日付の妻と息子に宛てた手紙で次のように述べている。

ヴォルフガングのシンフォニーがコンセル・スピリチュエルで成功したことを願っています。——パリで版刻されたシュターミッツのシンフォニーから判断すると、パリの人たちはうるさいシンフォニーが好きにちがいません。すべてが騒音で、他はごった混ぜ、ところどころに見事な楽想が出てきますが、お門違いな箇所にも不器用なかたちで出てくるのです。

7月3日、モーツァルトがザルツブルクの父宛てに書いた手紙に、6月18日に演奏された『パリ交響曲』が満場の喝采を受け、『ヨーロッパ通信』にも記事が出たことを報告している。ロンドンで刊行された6月26日付の『ヨーロッパ通信』には、「聖体の祝日の日のコンセル・スピリチュエルは、モーツァルト氏のサンフォニーによって始められた。この芸術家はまことに若い年齢のころからクラヴサン奏者のあいだで評判となっていたが、今日ではもっとも熟達した作曲家のなかに位置付けられうるのである。」と掲載されている。

練習のときは、とても心配でした。なぜって、ぼくは生まれてこのかたこんなひどい演奏を聴いたことがありませんでした。二度も続けてシンフォニーをガーガードンかき鳴らすさまは、とてもご想像になれないでしょう。——ぼくは本当にすっかり心配でした。

——できれば、もう一度稽古したかったのですが、いつもいろんなものを練習するので、もう時間がありませんでした。そんなわけで、心配と不満と怒りがいっぱいのまま、ベッドに向かわなくてはなりません。

翌日、コンセルには行って行くまいと決心していたのですが、夕方には天気がよくなったので、とうとう覚悟を固めました。もし稽古のときのようにまずいと思ったら、なんとしてもオーケストラのところへ行って、第一ヴァイオリンのラ・ウーセ氏の手からヴァイオリンを取り上げて、ぼく自身が指揮をしようと。…（中略）…

さて、いよいよシンフォニーが始まりました。ラーフはぼくと並んで立っていました。ちょうど第一楽章アレグロの真ん中に、たぶん受けるにちがいないとわかっていたパッセージがありました。そこで聴衆はみんな夢中になって——大変な拍手喝さいでした。——でも、ぼくはそれを書いているとき、どんな効果が生まれるか心得ていたので、最後にもう一度それを出しておきました。——そこでダ・カーポでした。アンダンテも受けましたが、とくに最後のアレグロがそうでした。当地では最後のアレグロはすべて、第一楽章と同様に、全楽器で同時にしかもたいてはユニゾンで始めると聞いていたので、ぼくは二部のヴァイオリンだけの弱奏で八小節だけ続けました。——そのあとすぐ強奏がきます。——すると聴衆は（ぼくの期待した通り）弱奏のところで「シーッ！」——つづいてすぐに強奏——それを聴くのと拍手が鳴ると同時でした。——そこでぼくはもううれしくて、シンフォニーが終わるとすぐにパレ・ロワイヤルに行って——おいしいアイスクリームを食べ——願をかけていたロザリオの祈りを唱えて——家へ帰りました。——ぼくはいつも家にいるのがいちばん好きです。家にいるか——さもないれば、善良で、真実な、信頼のおけるドイツ人——もしそれが独り者なら善良のキリスト教徒として生きるひと、もし既婚者なら妻を愛し、子供らをちゃんと育てているひとのところにいるのが、いちばん好きです。

実は、モーツァルトがこの手紙を書いている傍らには愛する母親の亡骸があった。22歳のモーツァルトは異国の地で独りぼっちになっていたのである。深夜、父に書いたこの手紙の冒頭は、次のように記されている。

最愛のお父さん！

非常にいやな、悲しいお知らせをしなくてはなりません。この前の 11 日付のお手紙に、もっと早く返事が書けなかったのも、そのためです。——

お母さんが重態です。——例のように、お母さんは瀉血をしてもらいました。そしてそれはどうしても必要なことでした。そのあと、とても工合はよかったです。——ところが、数日後、悪寒を訴え、同時に熱っぽいと言いました。——それから下痢と頭痛がおこりました。——とりあえず、わが家の家庭薬の痙攣止めの粉薬だけを使いました。黒色粉薬を使いたかったのですが、ちょうど持ち合わせがなく、ここでは手に入れることができませんでした。癩癩薬という名を言ってもわかりません。——でも、だんだん悪くなるばかりで——話すのはやっとなで、叫ばなければ耳も聞こえなくなったので——グリム男爵が自分の医者をよこしてくれました。——とても衰弱していて、まだ熱があり、うわごとを言います。——望みはあるとひとは言いますが、ぼくはあまり期待していません。——もう長いこと昼となく夜となく、ぼくは怖れと期待の間をさまよっています——でも、すべて神の御心にまかせています——そしてあなたもお姉さんも同様にしてくださいさうと思います。

…（中略）…

では、ごきげんよう。健康に注意して、神を信頼してください。——そうすれば慰めが得られるでしょう。愛するお母さんは全能の神の御手の中にあります。——もしぼくが望むように、なお余命を与えてくださるなら、神の恩寵に感謝しましょう。でも、みもとに召されるなら、ぼくらの不安や、心配や、絶望はすべて無用です。——神のなさることに理由がないわけではないのですから、これもしればぼくらのためになるのだと確信して、むしろ神の御心の中に毅然としていましょう。——では、さようなら、最愛のパパ、ぼくのためにも健康に気をつけてください。あなたの手で 1000 回のキスを、そしてお姉さんを心から抱擁します。

あなたのこの上なく従順な息子

父と姉には、いきなり母の死を知らせて悲しい思いをさせないよう、『パリ交響曲』のヒットを話題にしたが、同じ日、ザルツブルクのヨーゼフ・プリングー神父には真実を伝えている。そして、父が最悪のことを初めて耳にしても悲痛に、過酷に受け取りすぎないように支えてあげてほしいと彼への手紙を締めくくっている。

最上の友よ！

親展

友よ、ぼくとともに悲しんでくれ！——今日は、ぼくの生涯でもっとも悲しい日だった。——いまこれを夜の2時に書いている。——きみにぜひ伝えなくてはならないが、ぼくの母、愛する母はもういない！——神に召されたのだ。——神がお望みになったのが、ぼくにははっきりとわかる。——だから、ぼくは神の意志に委ねた。——神は母をぼくに与えてくれた以上、ぼくから奪うこともできるのだ。・・・（中略）・・・3日前に告解をすませ、聖体を拝受して、聖油の秘蹟も受けた。——最後の3日間、たえずうわごとを言いつづけていたが、今日の5時21分、臨終の苦しみが始まり、と同時にあらゆる感覚と意識がなくなった。——ぼくは母の手をにぎりしめ、話しかけたけど——母はぼくを見ることもなく、聞こうともせず、なにも感じなかった。——そんな状態が5時間つづき、夜の10時21分、母は息を引き取った。・・・（中略）・・・とにかく、友人のよしみで一つだけお願いしたいのは、かわいそうな父がこの悲しい知らせにゆっくりと心の準備をするようにしむけてほしい。——同じ郵便で父にも手紙を書いた。——でも、母が重態だということだけ。——いまはただ返事を待って——それに応じて書き加えるつもりだ。神が父に力と勇気を与えてくれますように！

7月9日、モーツァルトは父へ母が亡くなったことを伝える。

最愛のお父さん！

この上なく悲しい、つらいお知らせのひとつを、落ち着いて聞いてくださる覚悟ができています。——3日付の前便でもはや良い便りは期待できないことがわかりだったでしょう。——その同じ3日の夜、10時21分に、お母さんは神のみもとに永眠されました。——ぼくが手紙を書いたときには、もうすでに天上のよろこびを楽しんでおられて——すべては終わっていました。——実はその夜、手紙を書いたのです。——お父さんもお姉さんも、この小さな、どうしてもやむをえない嘘をお許しくださることと思います。——ぼく自身の苦痛を悲しみからあなたがたのことを考えたとき、この恐ろしい知らせをいきなりお伝えする気になれなかったからです。

一方、父は、7月13日付の息子に宛てた手紙によると、7月26日の妻の霊名の祝日のお祝いを書いている最中に3日付の息子からの手紙を受け取った。父は、射的会で出会ったプリンガー神父に慰められ、息子から伝えられた病状でもまだ望みを持っているか訊ねてくれたので、妻の死を確信していると答えたとこ、彼から真実が伝えられたのである。

今日、13日の午前。ちょうど今しがた、10時前に、7月3日付のおまえの悲しむべき手紙を受け取りました。私たち二人がどんな気持ちか、よく分かるだろう。私たちは一緒に泣いていたので、手紙がほとんど読めませんでした。——それにおまえのお姉さんは！——大いなる慈悲深き神よ！あなたのこの上なく神聖な御意志がおこなわれますように！私のいとしい息子よ！私がいつもできるかぎり神の御意志に忍従していることからして、私が涙でほとんど書くことができないのを、おまえはほんとに人間らしく自然だとわかってくれることだろう。結局のところ、私にはどんな結論がだせるのだろう？これを書いている今、お母さんはおそらく死んでいるだろうってこと以外の結論は出せないのです。・・・（中略）・・・手紙の書き出しに、私はお祝いの言葉を書きました。——それにナンネルはあの子のお祝いの言葉でこの手紙を締めくくるつもりでした。でも、あの子は（おまえはすぐ察しがつくだろうが）一字も書けないのだ。あの子が書こうとしたとき、ちょうど知らせがきたのだ。——一字書き下そうとするたびに、それがあの子の涙を眼に溢れさせるのだ。おまえはあの子が好きな弟なのだから、あの子に代わってあげなさい——もしおまえが、私たちの望んでいるように、まだ代わってやれるものなら。・・・（中略）・・・彼（プリンガー）は私に言いました。「そうです、奥様はお亡くなりになりました。」その瞬間、この急に降って湧いた不慮の出来事のため私の眼をおおい、私の見通す力を妨げていたヴェールが顔から取り払われたのだった。・・・（中略）・・・おまえの健康に注意なさい！私たちみんなを不幸にしないことです！ナンネルはまだプリンガーさん宛の手紙のことはなにも知っていません。でも私は、もうあの子の最愛のお母さんが死んでしまったとあの子が思うように、心の準備をさせています。



サン・トusstashu教会

母の葬儀はサン・トusstashu教会で行われた。教会の記録簿には、「1778年7月4日、土曜日。同日、マリー・アンヌ・ベルトル、57歳、バイエル、ザルツブルクの楽長レーオポルト・モーツァルトの妻、グロ・シュネ街で昨日死亡、息子ヴォルフガング・アメデ・モーツァルトと友人、国王近衛軽騎兵隊トランペット奏者フランソワ・エーナの立ち会いで、墓地に埋葬。〔署名〕モーツァルト、F・エーナ。助任司祭イリソン。葬列。」とある。母親の死後、7月9日付の手紙によると、モーツァルトはグロ・シュネ街の宿を引き払い、デピネー夫人とグリム男爵が同棲していたショセ・ダンタン街の家に身を寄せた。その後、モーツァルトはグリム男爵とトラブルになり、追い出されるようにして、9月26日、パリを離れた。父は、アウクスブルク、ミュンヘンに行けと執拗に命令したが、それには従わず、アロイジア・ヴェーバー嬢が暮らすマンハイムを目指した。アロイジアには7月30日にイタリア語で真面目で真剣なラブレターを送っていたが、梨の礫だった。父は、モーツァルトにアロイジアはミュンヘンのドイツ語劇場に600フロリン（153万円）で契約したので、マンハイムにはいないかもしれないと忠告したにもかかわらずだ。いきなりアロイジアに会うことに一抹の不安を感じていたのかもしれない。結局、モーツァルトは12月25日になってやっとミュンヘンに着き、29日に「きょうはただ泣きたいだけです。」と父に書き送っている。モーツァルトは1779年1月15日に故郷ザルツブルクに戻り、1月17日付で年俸450グルデン（115万円）の宮廷オルガン奏者に任命された。

父に母の死を伝えた7月9日付の手紙に大成功を取めた『パリ交響曲』が作曲されるに至った経緯が述べられている。モーツァルトは、コンセール・スピリチュエルの支配人ルグロが『サンフォニー・コンセルタント』を演奏しなかったことに腹を立てて、復活祭以降、彼に会っていなかったが、ラーフを訪ねた時に偶然ルグロに出くわした。そこで、ルグロは、聖体の祝日のために大交響曲を書いてもらえないか打診した。モーツァルトは、確かに演奏されて、いつかの『サンフォニー・コンセルタント』のような目に会わないという保証があるなら、引き受けてもよいと答えた。

——要するに——シンフォニーは大好評だった。——そして、ルグロはひどく満足して、あれが自分の手がけた最上のシンフォニーだと言い出しました。——でも、例のアンダンテは彼によるこんでもらえませんでした。——彼が言うには、転調が多すぎるし——それに長すぎるのです。——でもこれは、聴衆たちが第一楽章や終楽章のときのように、拍手喝采していつまでも騒ぎたてることを忘れたからです。——あのアンダンテは、ぼく自身と、すべての音楽通、愛好家、そして大多数の聴衆たちから、大拍手を浴びたのですから。——ルグロの言うのとはまったく反対です。——ごく自然で——しかも短いのです。——でも、彼（および彼の言う幾人か）を満足させるために、ぼくはもうひとつ別のアンダンテを書きました。——どちらもそれぞれに上出来です。——というのは、それぞれに別の性格をもっているからです。——でも、あとのほうが、いっそうぼくの気に入っています。——いずれ幸便で『ヴァイオリン教程』やピアノ曲、フォーグラーの本（和声法と作曲法）といっしょに、シンフォニーをお送りします。——そ

のときにご意見を伺いましょう。——8月15日——聖マリアの昇天の祝日に——新しいアンダンテを加えて、シンフォニーの2回目の演奏が行われます。——シンフォニーは「レ調」で、アンダンテは「ソ調」です。——ここでは「ニ調」とか「ト調」とか言いません。——いまやルグロはすっかりぼくの味方です。——

この手紙にある、ルグロが満足しなかった「転調が多く長い」アンダンテと新たに作曲したアンダンテについて、確かに二種類の第2楽章が残されているが、いずれも「転調が多く長い」とは言えないため、どちらが新たに作曲された第2楽章なのか議論が続いている。ニール・ザスローは、「転調が多い」は、「楽想が多すぎる」、「長い」は時間的に長いのではなく「退屈だ」という意味ではないかとしている。1985年に新モーツァルト全集から『パリ交響曲』が出版された際、校訂に使用された資料は、以下の通りである。

- A** ベルリンのドイツ国立図書館所蔵（現在はテュービンゲン大学図書館所蔵）の第1楽章と第2楽章の自筆譜。第1楽章は *Allegro assai* で、数多くの削除・訂正の跡があり、第2楽章として最初に構想したロンドは全ページ削除されている。第2楽章は *Andantino* の指定がある8分の6拍子で、ホ短調の独奏フルートのかなり長いパッセージやオーボエのソロが削除されるなど、数多くの修正と削除がある。
- B** ベルリンのドイツ国立図書館所蔵（現在はテュービンゲン大学図書館所蔵）の第2楽章の自筆譜。これは *Andantino* と指定された8分の6拍子の自筆譜 **A** を清書したもの（*Andante* に変更されている）で、**A** と一緒に綴じられている。テキストはおおむね自筆譜 **A** と同じであるが、若干の修正がある。
- C** ザルツブルクのモーツァルテウム所蔵のモーツァルト自身の書き込みがあるスコアの写譜。第2楽章の第6小節で中断されている。
- D** ベルリンのドイツ国立図書館所蔵（現在はテュービンゲン大学図書館所蔵）の第3楽章のスコアの写譜。これは、**A** ならびに **B** の楽譜と一緒に綴じられている。第3楽章の最も古い文献である。
- E** 1782年から88年の間にパリのシベール社から出版された初版譜。第1楽章は、上記 **A** と多くの違いがあり、第2楽章は4分の3拍子で書かれた *Andante* で、**B** や **C** とは異なるものである。

1958年に刊行された新モーツァルト全集版では、**A**と**B**がオリジナル稿として考え、**E**の第1楽章は、**A**の修正が継続されたものとみなした。従って、ルグロが、転調が多く長すぎるとしたのは、8分の6拍子の *Andante* で、彼を満足させるために書き直したのが4分の3拍子の *Andante* と解釈した。ところが、1965年にエルンスト・ヘスにより新しい資料**F**が報告されたのである。これは、モーツァルトの手によるスケッチで、スイスのアインジーデルン修道院の音楽図書館で発見された。このスケッチには、*Andante con moto* が指定された4分の3拍子の緩徐楽章がほぼ完成された状態で記されている。この草稿の下には『レ・プティ・リアン』のためと思われる4分の2拍子の舞曲と8分の6拍子の舞曲のスケッチが書かれているが、裏側には、なんと『パリ交響曲』の第3楽章の第136-42小節のスケッチが書かれていたのだ。これが意味するところは、『レ・プティ・リアン』（6月11日に初演）や『パリ交響曲』の第3楽章の完成（6月12日に試演）以前に4分の3拍子の第2楽章がすでにほぼ完成していた、ということである。そうすると、ルグロが、転調が多く長すぎるとしたのは、4分の3拍子の *Andante* で、彼を満足させるために書き直したのが8分の6拍子の *Andante* と従来の説と全く逆になってしまう。

アラン・タイソンによる使用五線紙の研究から、**A**で使用された五線紙は16段の縦長の用紙で、透かしには一房のブドウをあしらった冠がついた盾の模様とFIN DE / M [fleur-de-lis] IOHANNOT / DANNONAY / 1777とあることから、1777年に作られたフランス・アノーのジョアノー製であることが判明した。**B**も、*Andantino* と指定された8分の6拍子の自筆草稿は1777年ジョアノー製の16段の五線紙であるが、清書に使用された五線紙は16段から20段と様々で、パリ・ハイスラー（ホイスラー）社のバーゼルにある子会社で作られたスイス製だったのである。**C**で使用された五線紙は1777年ジョアノー製であるが、16段ではなく14段である。**D**も1777年ジョアノー製16段の五線紙が使われている。**F**も1777年ジョアノー製16段の五線紙である。

モーツァルトがパリを離れたのは、9月26日で、パリの東方310kmに位置するナンシーに一週間滞在している。10月3日にナンシーから父宛てに送られた手紙の中で「2つの序曲（『パリ交響曲』と9月8日に初演されたが失われた新曲の交響曲）と協奏交

響曲（これも失われた）はルグロに買い取られたが、自分の頭の中に新鮮に残っているので、帰宅したらもう一度書き上げるつもりだ。」と述べている。自筆譜**A**は、モーツァルトの遺品にあったものであったことが、未亡人コンスタンツェのためにゲオルク・ニコラウス・フォン・ニッセンが作成した目録に記載されている。そうすると、父への手紙にあるようにルグロに買い取られたものは自筆譜ではなく、それを清書したものであることになる。10月14日にはストラスブル（シュトラースブルク）に到着して、11月3日まで滞在している。その間、モーツァルトは、10月17日にはリサイタルを、10月24日と10月31日には劇場で大演奏会を催している。**B**のバーゼル製の五線紙は、ここで手に入れた可能性が高いことを考えると、ストラスブルの劇場での演奏会で『パリ交響曲』が演奏された可能性はないだろうか。父親へ頭の中に残っていたとした曲は、失われたもう一つの交響曲と協奏交響曲で、『パリ交響曲』に関しては、第1楽章と第2楽章の自筆草稿**A**と第3楽章の写譜**D**を保有していた。おそらく、パリで作成された第1楽章を清書した写譜**C**も持っていたのであろう。モーツァルトは、ストラスブルで入手した五線紙を使って自筆譜**A**をもとに第2楽章の清書**B**を作成した。その際、モーツァルトは若干の修正を施している（第1小節目の第1ヴァイオリン、第16小節目のホルン、第20小節目と第60-2小節目のバスなど、特に**A**では第73-4小節が長調、第75-6小節が短調であるのに対して、前者が短調に、後者は長調に修正されている）。それが、新モーツァルト全集で初版の第2楽章としているものである。

ニール・ザスローヤラン・タイソンは、**F**のスケッチに第3楽章と4分の3拍子の第2楽章が書かれていることから、4分の3拍子のアンダンテが第3楽章と同時期に作曲されたと主張しているが、第3楽章のスケッチの裏紙を後日、再利用して新しい第2楽章の草稿を書きつけた可能性も考えられる。モーツァルトは短い第2楽章を新たに作曲する必要があった。8分の6拍子のAndantinoは前述した通り、ホ短調の長大なフルートのソロが書かれており、4分の3拍子のAndanteより相当長くなってしまふ。従って、モーツァルトがパリで演奏した第2楽章は、修正を施す前の自筆草稿**A**（速度表示はAndantino）によるものと考えて間違いないと思う。そのため、本日の演奏会では自筆草稿**A**による版（旧モーツァルト全集版）を使用することにした。ちなみにモーツァルトのAndantinoは、Andanteより遅いテンポで、今日の解釈とは異なる。同じ曲想がくりかえされ、しかも、Andantinoなのでルグロは長く感じたのかもしれない。ただし、ルグロが言う「転調が多い」の解釈は未解決である。

モーツァルトは、1783年3月11日にヴィーンでこの交響曲を演奏した際（モーツァルトが父に宛てた手紙によるとグルックが『パリ交響曲』を絶賛し、モーツァルト夫妻とランゲ夫妻（コンスタンツェの姉アロイジーア夫妻）を昼食に招待したとある）に使用した楽譜は**A**、**B**、**D**から起こされたパート譜であった。**C**は、**D**を作成した写譜屋が33ページ（第1楽章の第231小節）までの弦楽パートを担当し、それにモーツァルトが第1楽章の第40小節までの管楽パートを書き入れている。これは、モーツァルトが三連符を16分音符に変更する（第82小節、93-8小節、101-2小節、178-85小節など）前の自筆譜が元になっているため、おそらくパリで作成したと思われる。しかし、第41小節目以降の管楽パートを含め、それ以降は、ヴィーンの写譜屋の手による。いつ、何のためにこれが作成されたのか不明で、第2楽章の第6小節までしか清書されていないのも謎である。**E**のシベール社から出版された『パリ交響曲』は、モーツァルトがルグロに渡してきた楽譜によるものだと考えるのはごく自然なことで、6月18日の初演時から第1楽章に修正を加え、第2楽章を新たに作り直して8月15日に再演したと考えるのに違和感はない。

もう一つ、興味深い資料がある。モーツァルトが1786年12月頃に自身で作成した第1クラリネットのパート譜である。このパート譜は、『プラハ交響曲』の第1楽章の作曲に使用された五線紙と同じものが使われている。『プラハ交響曲』の第3楽章フィナーレが、1786年のかなり早い時期に使われていた五線紙であったこと、筆跡が第1楽章、第2楽章とわずかに異なることから、アラン・タイソンは、『プラハ交響曲』のフィナーレは、当初『パリ交響曲』の別のフィナーレとして作曲されたが、『プラハ交響曲』のフィナーレに転用されたのではないか、という大胆な推測をしている。もっとも、本人はこんな大胆な仮説を提唱すると有益かつ優れた紙の研究法の信憑性を落としてしまうとして、控えめではあるが。

『パリ交響曲』については、モーツァルト自身の解説がある。6月12日付の父への手紙の中に「例のトゥッティのユニゾンで始まる《最初の弓の当たり》もちゃんと忘れずに入れておきましたよ！」との記載である。《最初の弓の当たり》“le premier coup d'archet”は、『パリ交響曲』の第1楽章冒頭のようにユニゾンで力強く始める手法である。第3楽章では聴衆の意表をついて、二部のヴァイオリンだけで弱音で始め、9小節目に急に大音量で演奏することによって大喝采を受けた。レーオポルトも指摘しているように、「パリの人たちはうるさいシンフォニーが好き」なのだ。モーツァルトは、7月3日付の手紙に「ちょうど第一楽章アレグロの真ん中に、たぶん受けるにちがいないとわかっていたパッサージュがありました。そこで聴衆はみんな夢中になって——大変な拍手喝さい

でした。——でも、ぼくはそれを書いているとき、どんな効果生まれるか心得ていたので、最後にもう一度それを出しておきました。——そこでダ・カーポでした。」と述べている。これがどの部分なのか、議論されてきた。特に、「そこでダ・カーポでした。」をどう解釈すればよいのか。「ダ・カーポ」は冒頭に戻るという意味であるが、再現部と解釈するとつじつまが合わない。エミリー・アンダーソンの英訳では、なぜか「そこで、『ダ・カーポ』と叫ばれた」となっている。ニコラウス・アーノンクールは、「たぶん受けるにちがいないとわかっていたパッサージュ」を第1楽章の第65-73小節、第220-7小節としている。一方、スタンリー・セイディは、「ダ・カーポ」を繰り返して解釈して第84-92小節、第238-50小節、第257-69小節だとしている。いずれも弱奏で優雅に演奏する箇所で、本当にここで聴衆がみんな夢中になって大変な拍手喝さいをしたのだろうか？私は、パリの人が好きなら「うるさい」箇所は、単純な音形が繰り返される、第105-8小節と第111-4小節で、第251-4小節にもう一度出し、270-3小節で繰り返した箇所ではないかと想像する。また、「ダ・カーポ」は、第1楽章の最後の最後で演奏される冒頭のテーマを指しているのではないだろうか。特に第251-4小節と270-3小節の直前にはわくわくするようなクレッシェンドがあり（これは、モーツァルトがフランスで体得したものと思われる）、パリの聴衆は大興奮したであろう。



第1楽章 第251～4小節

モーツァルトはコンセール・スピリチュエルのためにこの交響曲を作曲した。1778年当時、コンセール・スピリチュエルのオーケストラの編成は、第1ヴァイオリン11、第2ヴァイオリン10、ヴィオラ5、チェロ8、コントラバス5、フルート、オーボエ、クラリネットが合計7、ファゴット4、ホルンとトランペットが合計5、ティンパニ1というかなり大きな編成であった。これは、モーツァルトがマンハイムで選帝侯の礼拝堂で聞いた荘厳ミサを演奏したオーケストラの編成とほとんど同じである。ザルツブルクでは経験することがなかったすべての種類の管楽器が揃った大編成だったのである。彼が相当意気込んで作曲したことは想像に難くない。また、パリで受け入れてもらえるために、フランス人の好みに合うよう、念入りに何度も何度も自筆譜に修正を施しているのだ。ちなみに、1782年から88年頃にパリのシベール社から出版された初版譜の表紙には、Du Concert Spirituel / Sinfonie / A Deux Violons Alto et Basse / deux Hautbois deux cors / 2 Clarinettes 2 flutes 2 bassons / Trompette et timballe ad libitum / Composé Par / W. A. Mozart とあり、管楽器の順番とともに、トランペットとティンパニの加除は任意になっているのが興味深い。

彼は人が好すぎます。積極的な所が少なく、だまされ易く、成功の可能性のある手段を知らなさすぎます。ここでは何かをやり遂げるには要領よく、行動的で、大胆でなくてはなりません。私は彼の運命のためには半分の才能で良いからその代わり倍の器用さが欲しいです。そうなれば彼のことで心配はしないのですが。…（中略）…当地では殆んど人は音楽を全く理解しません。それで何でも有名な名前でも評価します。一つの作品の本当の価値が分かるのは極く少数の人です。大衆は目下の所おかしなことにピッチーニ派とグルック派に分かれています。…（中略）…多くの凡庸な、嫌悪にしか値しないような音楽家たちが法外な成功を収めているような国であなたの息子さんだけが窮地を脱せられないのを私は非常に恐れます。

1778年7月27日、グリム男爵はレーオポルト・モーツァルトにこのような手紙を送っている。モーツァルトは、若かった。いや、実直な彼は、生涯にわたって要領よく行動することは不得手で、信念を曲げず親切な人からの忠告も聞こうとしなかった。だからこそ200年以上たった今でも多くの人々から愛され続けているのかもしれない。もし、グリム男爵の意見を聞き入れていれば、パリでは成功したかもしれないが、後世に名は残らなかったであろう。最愛の母を亡くしたパリで、念願だった定職は得られず、作曲した楽譜もルヴロに紛失され、散々な目にあい、アロイージア・ヴェーバー嬢から愛を拒絶され、借金だけが残った。22歳の若者が一人ぼっちで周囲に気を遣い、精神的に相当つらい日々を送ったことは容易に推測できる。しかし、彼は、パリ滞在の半年間で様々な様式の音楽を聴き、それを吸収した。9月11日付の父への手紙で今回の旅をこう総括している。

ぼくは断言しますが、旅をしないひとは（少なくとも芸術や学問にたずさわるひとたちでは）まったく哀れな人間です！——そして、もし大司教が二年ごとに一回の旅を許可してくれないなら、ぼくはどうしても契約を受け入れるわけにはいかないと、断言しておきます。凡庸な才能の人間は、旅をしようしまいと、常に凡庸なままです。——でも、優れた才能のひとは（ぼく自身それを認めなければ、神を冒瀆するものです）——いつも同じ場所にいれば、ダメになります。もし大司教がぼくを信頼してくれたら、ぼくはたちまち彼の楽団を有名にしてみせましょう。これは間違いなく本当のことです。——今度の旅はぼくにとって無駄ではなかったと誓って言えます。——もちろん、作曲の点でね。

2018年7月12日 武本 浩



【参考文献】

1. Hermann Beck: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie IV: Orchesterwerke, Werkgruppe 11: Sinfonien, Band 5, Bärenreiter Verlag (1957).
 2. Franz Giegling: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie V: Konzerte, Werkgruppe 14: Konzerte für ein oder mehrere Streich-, Blas- und Zupfinstrumente und Orchester, Band 6: Konzert für Flöte und Harfe, Bärenreiter Verlag (1983).
 3. Harald Heckmann: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 6: Musik zu Schauspielen, Pantomimen und Balletten Band 2: Musik zu Pantomimen und Balletten, Bärenreiter Verlag (1963).
 4. Alan Tyson: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie X: Supplement, Werkgruppe 33: Dokumentation der Autographen Überlieferung, Abteilung 2: Wasserzeichen-Katalog, Bärenreiter Verlag (1992).
 5. Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts 8. Auflage, Breitkopf & Härtel (1983).
 6. Alan Tyson: The Two Slow Movements of Mozart's Paris Symphony K297, The Musical Times, 122 (1655) 17-21 (1981).
 7. Alan Tyson: Mozart, Studies of the Autograph Scores, Harvard University Press (1987).
 8. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989).
 9. Emily Anderson: Mozart's Letters An illustrated Selection, Bulfinch Press (1990).
 10. Michael Lorenz: The Jenamy Concerto, Newsletter of the Mozart Society of America, IX (1), 1-3 (2005).
 11. ハンス・レートリッヒ 著, 福田弥 訳: オイレンブルク・スコア, モーツァルト交響曲第31番「パリ」, 全音楽譜出版社 (2006) .
 12. オットー・エーリヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル 編, 井本响二 訳: ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア (1989) .
 13. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集I, 白水社 (1976) .
 14. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集II, 白水社 (1980) .
 15. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (1990) .
 16. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995) .
 17. アラン・タイソン (北村結花訳) , 新年代推定法 – すかしと紙についての論考, モーツァルトの音と言葉, 岩波書店 (1991) .
 18. エレーヌ・ドラレクス 著, ダコスタ吉村花子 訳: 麗しのマリー・アントワネット ヴェルサイユ宮殿での日々, グラフィック社 (2016) .
 19. マリ＝フランソワーズ・クリストゥ 著, 佐藤俊子 訳: バレエの歴史, 白水社 (1970) .
 20. フェルディナンド・レイナ 著, 小倉重夫 訳: バレエの歴史, 音楽之友社 (1974) .
 21. ノヴェール 著, 小倉重夫 訳: 舞踊とバレエについての手紙 原典, 富山房 (1974) .
 22. ルードルフ・アンガー＝ミュラー 著, 吉田泰輔 訳: モーツァルトのオペラ, 音楽之友社 (1991) .
 23. 吉成順: 「ジュノム嬢」の伝説, コリカ, 23 (9) 151-159, 青土社 (1991) .
 24. 木村文昭、谷本光音: 瀉血療法, 日医雑誌, 139 (2) 334-337 (2010).
-

大阪モーツァルトアンサンブル Osaka Mozart Ensemble

1984年、大阪大学大学院生を中心に発足。以後、京阪神の各大学オーケストラOBを結集し、年間4～5回の演奏活動を続けている。指揮者を置かず自発的なアンサンブルの実現を目指す。演奏会では主にモーツァルトの作品を取り上げ、最新の研究成果に基づいて編纂された原典版を使用し、当時の一般的な編成で演奏している。1986年6月に行った特別演奏会では、ヴィーン・フィルのアルフレート・プリント氏、アダルベルト・スコッチ氏等と共演し、好評を博した。1986年から1990年にステラ・プロテッチ氏と4回共演。1988年5月には、小山亮氏と新モーツァルト全集版によるホルン協奏曲全曲を録音した。1989年から1994年、関西モーツァルト協会例会に7回出演。1991年12月5日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂におけるモーツァルト没後200年記念追悼ミサでレクイエムを演奏した。1995年にはザルツブルク大聖堂でミサに出演、モーツァルテウム大ホール、ヴィーン・ミノーレン教会で演奏会を行った。1996年から2000年にかけてモーツァルト劇場例会に5回出演。2004年、指揮者なしでのモーツァルトの交響曲全曲演奏を20年かけて完結した。

Intendant: 武本 浩

Konzertmeister: 大西 正人

Violinen: 濱田 利正 久保 聡一 佐藤 奈津子 清水 雅代 角谷 くらら
田邊 明子 筒泉 直樹 藤井 聡子 横小路 美貴子 塩沢 まり子

Bratschen: 能勢 徹 堀井 博子 満多野 穂高 高橋 淑子

Violoncelli: 加納 隆 岩田 暢子

Kontrabäße: 横田 健司 片岡 充照

Flöten: 亀田 紗里菜 鈴木 典子

Oboen: 小林 靖之 利谷 久美

Klarinetten: 柳楽 由美子 大倉 久和

Fagotte: 尾家 祥介 服部 真貴子

Hörner: 武本 浩 北脇 知己 中根 慎介

Trompeten: 山崎 雅夫 中嶋 香織

Pauken: 船戸 哲也



大阪モーツァルトアンサンブル第 68 回定期演奏会

日時: 2019年1月20日(日) 午後2時開演

会場: 寝屋川市立地域交流センター アルカスホール

曲目: W. A. モーツァルト ファゴット協奏曲 変ロ長調 KV 191 (186e) 他

独奏: 常田 麻衣



亀岡混声合唱団第 29 回定期演奏会

日時: 2018年11月18日(日) 午後2時開演(午後1時半開場)

会場: ガレリアかめおか響ホール

曲目: W. A. モーツァルト ミサレヴィイス KV 259 オルガンソロミサ

独唱: 服部 響子 (Sop) 矢守 渚奈子 (Alt) 納多 正明 (Ten) 油井 宏隆 (Bass)

指揮: 板倉 計夫 合唱: 亀岡混声合唱団 管弦楽: 大阪モーツァルトアンサンブル

大阪モーツァルトアンサンブル 演奏記録

弦楽器のための協奏曲、管楽器のための協奏曲、交響曲、ミサ曲

Werk			Tonart	KV Nr.	Solist(en)	Ort	Datum
Konzert	für Violine	Nr. 1	B-Dur	KV207	Tomoko Tagawa	Toyonaka	25.Juni 2005
Konzert	für Violine	Nr. 2	D-Dur	KV211	Tomoko Tagawa	Toyonaka	24.September 2006
Konzert	für Violine	Nr. 3	G-Dur	KV216	Junko Suzuki	Toyonaka	26.September 1987
Konzert	für Violine	Nr. 3	G-Dur	KV216	Miwako Abe	Kyoto	17.November 1993
Konzert	für Violine	Nr. 4	D-Dur	KV218	Koichi Hibi	Toyonaka	7.September 1986
Konzert	für Violine	Nr. 4	D-Dur	KV218	Chika Yamashita	Kyoto	30.Juni 1994
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219	Noriko Kohzai	Kyoto	19.Oktober 1989
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219	Hisako Hashimoto	Kyoto	19.Jänner 1993
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219	Hidemichi Kimura	Toyonaka	14.Jänner 1995
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219/261	Takumi Nozawa	Toyonaka	7.Juni 2014
Rondo	für Violine		B-Dur	KV261a			
Rondo	für Violine		C-Dur	KV373			
Concertone	für zwei Violinen		C-Dur	KV186E	Masato Ohnishi Toshimasa Hamada	Toyonaka	27.März 1988
Concertone	für zwei Violinen		C-Dur	KV186E	Mariko Shiozawa Tomoko Yamane	Ritto	7.Juli 2002
Konzertante Sinfonie	für Violine und Viola		Es-Dur	KV320d	Yuki Mori (Vn) Tomoko Yamasaki (Va)	Toyonaka	15.Juli 1989
Konzert	für Flöte	Nr.1	G-Dur	KV285c	Kazuyoshi Hashimoto	Kyoto	19.Jänner 1993
Konzert	für Flöte	Nr.1	G-Dur	KV285c	Kazuyoshi Hashimoto	Toyonaka	27.März 1993
Konzert	für Flöte	Nr.2	D-Dur	KV285d	Noriko Mizukoshi	Toyonaka	28.April 1990
Konzert	für Flöte	Nr.2	D-Dur	KV285d	Kazuya Nishikawa	Kyoto	30.Juni 1994
Andante	für Flöte		C-Dur	KV285e	Kazuyoshi Hashimoto	Toyonaka	27.März 1993
Konzert	für Flöte und Harfe		C-Dur	KV297c	Noriko Kurata (Fl) Chiaki Noda (Hf)	Toyonaka	22.September 1985
Konzert	für Flöte und Harfe		C-Dur	KV297c	Tomoko Ichikawa (Fl) Naori Uchida (Hf)	Otsu	21.Jänner 2001
Konzert	für Flöte und Harfe		C-Dur	KV297c	Kana Otani (Fl) Maho Yamamoto (Hf)	Toyonaka	21.Juli 2018
Konzert	für Oboe		C-Dur	KV285d	Kaeko Sumino	Toyonaka	10.Februar 1991
Konzert	für Oboe		C-Dur	KV285d	Benito Arellano Garcia	Joyo	29.April 2007
Konzert	für Klarinette	<Rekonstruierte Fassung für Bassettklarinette>	A-Dur	KV622	Hisashi Mito	Ritto	28.Mai 2006
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Hisashi Mito	Toyonaka	13.März 1985
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Alfred Prinz	Takarazuka	13.Juni 1986
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Shin'ichiro Ohkawa	Toyonaka	14.Juni 1992
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Yumiko Nagira	Toyonaka	10.März 2002
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Kyoko Kato	Toyonaka	31.Oktober 2010
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Kuri Takeuchi	Toyonaka	22.Juli 2017
Konzert	für Fagott		B-Dur	KV186e	Shosuke Oka	Toyonaka	29.April 1992
Rondo	für Horn		Es-Dur	KV371	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzert	für Horn	Nr.1	D-Dur	KV386b	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzert	für Horn	Nr.1	D-Dur	KV386b	Chiemi Kosaka	Toyonaka	27.Juni 2015
Konzert	für Horn	Nr.2	Es-Dur	KV417	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzert	für Horn	Nr.2	Es-Dur	KV417	Chiemi Kosaka	Toyonaka	27.Juni 2015
Konzert	für Horn	Nr.3	Es-Dur	KV447	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzert	für Horn	Nr.4	Es-Dur	KV495	Masaaki Kawanishi	Toyonaka	2.September 1984
Konzert	für Horn	Nr.4	Es-Dur	KV495	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzertante Sinfonie	für zwei Flöten, zwei Oboen, und zwei Fagotte		G-Dur	KV320	Chieko Mori (Fl) Hiroyuki Ohmori (Fl) Masakatsu Inoue (Ob) Kumi Toshitani (Ob) Shosuke Oka (Fg) Makiko Hattori (Fg)	Toyonaka	6.Juli 1996
Konzertante Sinfonie	für Violine, Viola und Violoncello		A-Dur	KV 320e			
Konzertante Sinfonie	für Oboe, Klarinette, Horn und Fagott		Es-Dur	KV Anh. C14.01			

Werk		Tonart	KV Nr.	KV1 (1905)	KV3 (1937)	KV6 (1964)		Ort	Datum
Sinfonie	Nr. 1	<1. Fassung>	Es-Dur	KV 16	16	16		Toyonaka	9.März 2003
Sinfonie	Nr. 1	<2. Fassung>	Es-Dur	KV 16	16	16		Toyonaka	18.März 1989
Sinfonie			a-moll	KV 16a	Anh. 220	16a	"Odenser-Sinfonie"	W.A.Mozart?	Otsu
Sinfonie	Nr. 4		D-Dur	KV 19	19	19		Toyonaka	26.September 1987
Sinfonie			F-Dur	KV 19a	Anh. 223	19a		Toyonaka	9.April 1995
Sinfonie			C-Dur	KV 19b	Anh. 222	19b			
Sinfonie	Nr.5		B-Dur	KV 22	22	22			
Sinfonie			D-Dur	KV 32	32	32	"Galimathias Musicum"	Toyonaka	30.September 1995
Sinfonie			C-Dur	KV 35	35	35	"Die Schuldigkeit des ersten Gebots"	Kyoto	27.Oktober 1990
Sinfonie			D-Dur	KV 38	38	38	"Apollo et Hyacinthus"	Toyonaka	27.März 1993
Sinfonie	Nr. 43		F-Dur	KV 42a	76	42a		Toyonaka	9.April 1995
Sinfonie	Nr. 6		F-Dur	KV 43	43	43		Toyonaka	5.Jänner 1997
Sinfonie	Nr. 7	<1. Fassung>	D-Dur	KV 45	45	45		Toyonaka	6.Juli 1997
Sinfonie		<1. Fassung>	G-Dur	KV 45a	Anh. 221	45a	"Alte Lambacher-Sinfonie"	Toyonaka	28.April 1990
Sinfonie		<2. Fassung>	G-Dur	KV 45a	Anh. 221	45a	"Alte Lambacher-Sinfonie"	Toyonaka	14.Juni 1992
Sinfonie	Nr.55		B-Dur	KV 45b	Anh. 214	45b		Toyonaka	29.April 1992
Sinfonie	Nr. 7	<2. Fassung>	D-Dur	KV 46a	51	46a	"La finta semplice"	Toyonaka	6.Juni 2004
Sinfonie			G-Dur	KV 46b	50	46b	"Bastien et Bastienne"	Toyonaka	14.Mai 1988
Sinfonie	Nr. 8		D-Dur	KV 48	48	48		Toyonaka	10.Februar 1991
Sinfonie			D-Dur	KV 62a	100	62a	"nach der Serenade"	Toyonaka	23.März 1996
Sinfonie			D-Dur	KV 66c	Anh. 215	66c		Toyonaka	5.Jänner 1997
Sinfonie			B-Dur	KV 66d	Anh. 217	66d			
Sinfonie			B-Dur	KV 66e	Anh. 218	66e			
Sinfonie	Nr. 9		C-Dur	KV 73	73	73			
Sinfonie	Nr. 44		D-Dur	KV 73l	81	73l		Ritto	14.Dezember 2003
Sinfonie	Nr. 47		D-Dur	KV 73m	97	73m		Toyonaka	6.Juli 1991
Sinfonie	Nr. 45		D-Dur	KV 73n	95	73n		Toyonaka	10.Februar 1991
Sinfonie	Nr. 11		D-Dur	KV 73q	84	73q		Toyonaka	20.Dezember 1998
Sinfonie	Nr. 10		G-Dur	KV 74	74	74		Toyonaka	14.Jänner 1995
Sinfonie			D-Dur	KV 74a	87	74a	"Mitridate, Re di Ponto"	Toyonaka	27.März 1993
Sinfonie			d-moll	KV 74c	118	74c	"Betulia Liberata"	Toyonaka	27.Dezember 1987
Sinfonie	Nr. 42		F-Dur	KV 75	75	75		Toyonaka	27.September 1993
Sinfonie	Nr. 12		G-Dur	KV 75b	110	75b		Toyonaka	18.Oktober 1992
Sinfonie			D-Dur	KV 111+111a	111+120	111+111a	"Ascanio in Alba"	Toyonaka	27.März 1988
Sinfonie			C-Dur	KV 111b	96	111b		Toyonaka	15.Juli 1989
Sinfonie	Nr. 46		F-Dur	KV 112	112	112		Toyonaka	24.Dezember 1988
Sinfonie	Nr. 13		A-Dur	KV 114	114	114		Toyonaka	6.Juni 2004
Sinfonie	Nr. 14		G-Dur	KV 124	124	124		Toyonaka	15.Juli 1989
Sinfonie	Nr. 15		C-Dur	KV 128	128	128		Toyonaka	29.April 1998
Sinfonie	Nr. 16		G-Dur	KV 129	129	129		Toyonaka	14.Juni 1992
Sinfonie	Nr. 17		F-Dur	KV 130	130	130		Toyonaka	2.September 1984
Sinfonie	Nr. 18		Es-Dur	KV 132	132	132		Toyonaka	25.September 1988
Sinfonie	Nr. 19	<1. Fassung>	Es-Dur	KV 132	132	132		Toyonaka	9.März 2003
Sinfonie	Nr. 19	<2. Fassung>	Es-Dur	KV 132	132	132		Ritto	7.Juli 2002
Sinfonie	Nr. 20		D-Dur	KV 133	133	133		Toyonaka	6.Juli 1991
Sinfonie	Nr. 21		A-Dur	KV 134	134	134		Toyonaka	6.Juli 1996
Sinfonie			D-Dur	KV 135	135	135	"Lucio silla"	Toyonaka	19.August 2001
Sinfonie	Nr. 50		D-Dur	KV 141a	161+163	141a	"Il sogno di Scipione"	Toyonaka	5.März 1994
Sinfonie	Nr. 26		Es-Dur	KV 161a	184	161a		Toyonaka	6.Juli 1996
Sinfonie	Nr. 27		G-Dur	KV 161b	199	162a		Toyonaka	7.Juli 1990
Sinfonie	Nr. 22		C-Dur	KV 162	162	162		Toyonaka	6.Juli 1996
Sinfonie	Nr. 23		D-Dur	KV 162b	181	162b		Toyonaka	24.Dezember 1988
Sinfonie			D-Dur	KV 167a	185	167a	"nach der Serenade"	Toyonaka	10.März 2002
Sinfonie	Nr. 24		B-Dur	KV 173dA	182	166c		Toyonaka	14.Mai 1988
Sinfonie	Nr. 25		g-moll	KV 173dB	183	183		Toyonaka	21.Februar 1986
Sinfonie	Nr. 29		A-Dur	KV 186a	201	186a		Toyonaka	7.September 1986
Sinfonie	Nr. 30		D-Dur	KV 186b	202	186b		Toyonaka	26.Dezember 1999
Sinfonie			D-Dur	KV 189b	203	189b	"nach der Serenade"	Ritto	14.Dezember 2003
Sinfonie	Nr. 28		C-Dur	KV 189k	200	173e		Toyonaka	23.März 1996
Sinfonie			D-Dur	KV 207a	121	207a	"La finta giardiniera"	Toyonaka	29.April 1998
Sinfonie			D-Dur	KV 213a	204	213a	"nach der Serenade"	Toyonaka	19.August 2001
Sinfonie			C-Dur	KV 208+213c	208+102	208+213c	"Il Re pastore"	Toyonaka	28.April 1990
Sinfonie			D-Dur	KV 248b	250	248b	"nach der Serenade"	Toyonaka	20.Dezember 1998
Sinfonie	Nr. 31	<1. Fassung, Original>	D-Dur	KV 300a	297	300a	"Pariser-Sinfonie"	Toyonaka	21.Juli 2018
Sinfonie	Nr. 31	<1. Fassung>	D-Dur	KV 300a	297	300a	"Pariser-Sinfonie"	Toyonaka	10.Februar 1991
Sinfonie	Nr. 31	<2. Fassung>	D-Dur	KV 300a	297	300a	"Pariser-Sinfonie"	Toyonaka	26.Dezember 1999
Sinfonie	Nr. 32		G-Dur	KV 318	318	318		Toyonaka	25.September 1988
Sinfonie	Nr. 33	<1. Fassung>	B-Dur	KV 319	319	319		Toyonaka	6.Oktober 2012
Sinfonie	Nr. 33	<2. Fassung>	B-Dur	KV 319	319	319		Toyonaka	18.März 1989
Sinfonie			D-Dur	KV 320	320	320	"nach der Serenade"	Toyonaka	5.Jänner 1997
Sinfonie	Nr. 34		C-Dur	KV 338	338	338		Toyonaka	18.Oktober 1992
Sinfonie			C-Dur	KV 384	384	384	"Die Entführung aus dem Serail"	Toyonaka	27.März 1988
Sinfonie	Nr. 35	<1. Fassung>	D-Dur	KV 385	385	385	"Haffner-Sinfonie"	Toyonaka	5.März 1994
Sinfonie	Nr. 35	<2. Fassung>	D-Dur	KV 385	385	385	"Haffner-Sinfonie"	Toyonaka	27.März 1988
Sinfonie			D-Dur	KV 424a	430	424a	"Lo sposo deluso"	Toyonaka	6.Juli 1991
Sinfonie	Nr. 36		C-Dur	KV 425	425	425	"Linzer-Sinfonie"	Toyonaka	13.März 1985
Sinfonie	Nr. 37		G-Dur	KV 425a+Anh. A53	444	425a		M.Haydn P.16	7.Juli 1990
Sinfonie	Nr. 38		D-Dur	KV 504	504	504	"Prager-Sinfonie"	Toyonaka	22.September 1985
Sinfonie	Nr. 39		Es-Dur	KV 543	543	543		Toyonaka	21.Februar 1986
Sinfonie	Nr. 40	<1. Fassung>	g-moll	KV 550	550	550		Otsu	27.November 2004
Sinfonie	Nr. 40	<1. Fassung, Variant>	g-moll	KV 550	550	550		Toyonaka	27.September 1993
Sinfonie	Nr. 40	<2. Fassung>	g-moll	KV 550	550	550		Toyonaka	22.Februar 1987
Sinfonie	Nr. 40	<2. Fassung, Variant>	g-moll	KV 550	550	550		Toyonaka	22.Juli 2017
Sinfonie	Nr. 41		C-Dur	KV 551	551	551	"Jupiter-Sinfonie"	Toyonaka	18.März 1989
Sinfonie	Nr. 3		Es-Dur	Anh. A51	18	Anh. 109i		C.F.Abel Op.7/6	Toyonaka
Sinfonie			D-Dur	Anh. A52	291	Anh. 109xi		M.Haydn P.43 [Sherman 287]	Toyonaka
Sinfonie			D-Dur	Anh. A59	-	388d		J.Haydn Hob.I:75	
Sinfonie			G-Dur	Anh. A59	-	389d		J.Haydn Hob.I:47	Toyonaka
Sinfonie			D-Dur	Anh. A59	-	390d		J.Haydn Hob.I:62	26.September 1987
Sinfonie			C-Dur	Anh. A59	-	391d		Anh. A59	
Sinfonie			C-Dur	Anh. C11.01	-	16b		Anh. C11.01	
Sinfonie	Nr. 2		B-Dur	Anh. C11.02	17	Anh. 223a		L.Mozart?	
Sinfonie	Nr. 54		B-Dur	Anh. C11.03	Anh. 216	74g		L.Mozart	Ritto
Sinfonie	Nr. 48		F-Dur	Anh. C11.04	98	Anh. 223b		W.A.Mozart?	Toyonaka
Sinfonie			B-Dur	Anh. C11.05	-	311a		?	
Sinfonie			D-Dur	Anh. C11.06	Anh. 219	Anh. 291b		?	
Sinfonie			D-Dur	Anh. C11.07	-	Anh. 223		L.Mozart	
Sinfonie			F-Dur	Anh. C11.08	-	Anh. 223		nur Incipit bekannt	
Sinfonie			G-Dur	Anh. C11.09	Anh. 293	Anh. 293		nur Incipit bekannt	
Sinfonie			F-Dur	Anh. C11.10	-	Anh. 293c		L.Mozart	
Sinfonie			C-Dur	Anh. C11.11	-	-		I.Pleyel	
Sinfonie			F-Dur	Anh. C11.12	-	-		A.Gyrowetz	
Sinfonie			G-Dur	Anh. C11.13	Anh. 294	Anh. 294		K.Dittersdorf	
Sinfonie			C-Dur	Anh. C11.14	-	-	"Sinfonia pastorale"	L.Mozart	Toyonaka
Sinfonie			C-Dur	Anh. C11.15	-	-		F.J.Eberl	20.Dezember 1998
Sinfonie			G-Dur	Anh. C11.16	-	Anh. 109g		?	
Sinfonie								?	

Werk	Dirigent	Solist(en)	Orgel	Chor	Ort	Datum	
Missa "Waisenhaus Messe" c-moll KV139 (47a)	板倉 計夫	片山 映子 (S) 福原 寿美枝 (A) 宮本 佳計 (T) 小林 裕 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール	5.November 2000	第11回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa brevis G-Dur KV49 (47d)	板倉 計夫	片山 映子 (S) 矢守 眞弓 (A) 宮本 佳計 (T) 青木 耕平 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガリアカめおか響ホール	2.November 2003	第14回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa brevis d-moll KV65 (61a)	板倉 計夫	片山 映子 (S) 菊池 敏子 (A) 宮本 佳計 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガリアカめおか響ホール	4.November 2002	第13回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa "Dominicus Messe" C-Dur KV66	板倉 計夫	町田 百々子 (S) 菊池 敏子 (A) 納多 正明 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール	3.Dezember 2006	第17回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa brevis G-Dur KV140 (Anh. C 1.12)	板倉 計夫		松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガリアカめおか響ホール	2.Dezember 2007	第18回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa "Missa in honorem Sanctissimae Trinitatis" C-Dur KV167	板倉 計夫		松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガリアカめおか響ホール	27.November 2005	第16回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa brevis "Kleine Credo-Messe" F-Dur KV192 (186f)	板倉 計夫	片山 映子 (S) 菊池 敏子 (A) 宮本 佳計 (T) 青木 耕平 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガリアカめおか響ホール	4.November 2001	第12回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa brevis D-Dur KV194 (186h)	板倉 計夫	土屋 栄 (S)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡市役所市民ホール	30.Oktober 1994	第5回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa "Spatzen-messe" C-Dur KV220 (196b)	板倉 計夫	町田 百々子 (S) 福原 寿美枝 (A) 宮本 佳計 (T) 青木 耕平 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール	27.Oktober 1996	第7回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa "Spatzen-messe" C-Dur KV220 (196b)	板倉 計夫	四方 典子 (S) 児玉 祐子 (A) 納多 正明 (T) 油井 宏隆 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガリアカめおか響ホール	26.November 2017	第28回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa longa "Spaur-Messe" C-Dur KV262 (246a)	板倉 計夫		松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール	29.November 2009	第20回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa longa "Große Credo-messe" C-Dur KV257	板倉 計夫	緋田 芳江 (S) 菊池 敏子 (A) 宮本 佳計 (T) 今泉 仁志 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール	1.November 1998	第9回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa brevis "Spaur-Messe[?]" C-Dur KV258	板倉 計夫		松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガリアカめおか響ホール	30.November 2008	第19回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa brevis "OrgelSolo-Messe" C-Dur KV259	板倉 計夫	野口 裕子 (S) 矢守 眞弓 (A) 宮本 佳計 (T) 油井 宏隆 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガリアカめおか響ホール	28.November 2004	第15回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa brevis B-Dur KV275 (272b)	今村 雅俊	山崎 直美 (S) 津田 秀子 (A) Van de Waalle (T) 大谷 仁士 (B)	後藤 緑	セレスナ合唱団	姫路・姫路文化センター小ホール	7.Dezember 1986	セレスナ合唱団'86定期演奏会
Missa brevis B-Dur KV275 (272b)	板倉 計夫	野口 裕子 (S) 矢守 眞弓 (A) 宮本 佳計 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡市役所市民ホール	29.Oktober 1995	第6回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa brevis B-Dur KV275 (272b)	Seiji Makino	Francisca Montiel (S) Ruth Kramer (A) Moiseas Chaaves (T) Kurt Koller (B)	Gerhard	Salzburger Domchor	Salzburg・Salzburger Dom	5.November 1995	ミサ
Missa "Krönungs-messe" C-Dur KV317	板倉 計夫	松井 美路子 (S) 福原 須美枝 (A) 宮本 佳計 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール	26.Oktober 1997	第8回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa "Krönungs-messe" C-Dur KV317	武本 浩	高橋 照美 (S) 中屋 早紀子 (A) 五郎 俊朗 (T) 黒田 博 (B)	小樽 由布子	大場 恭子、渡辺 有里香 大井 道子、福山 美由希 鈴木 准、高田 正人 瀧井 崇、高澤 孝一	東京・カトリック麻布教会	31.Mai 1998	モーツァルト劇場1998年5月例会
Missa "Krönungs-messe" C-Dur KV317	板倉 計夫	内藤 千洋子 (S) 矢守 眞弓 (A) 納多 正明 (T) 油井 宏隆 (B)	松岡 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガリアカめおか コンベンションホール	29.November 2015	第26回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa "Krönungs-messe" C-Dur KV317	武本 浩	四方 典子 (S) 中原 由美子 (A) 松原 友 (T) 萩原 寛明 (B)	桑山 彩子	亀岡混声合唱団	豊中・豊中市立ローズ文化ホール	30.Jänner 2016	大阪モーツァルトアンサンブル 第62回定期演奏会
Missa solemnis C-Dur KV337	板倉 計夫	平井 久恵 (S) 菊池 敏子 (A) 宮本 佳計 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール	31.Oktober 1999	第10回亀岡混声合唱団定期演奏会
Missa c-moll KV427 (417a)	武本 浩	高橋 照美 (S) 佐竹 由美 (S) 五郎 俊朗 (T) 黒田 博 (B)	小樽 由布子	赤池 優、井上 ゆかり、 大場 恭子、田中 詩乃 大井 道子、福山 美由希 大木 太郎、高田 正人 滝美 史生、杉山 範雄	東京・カトリック麻布教会	18.Mai 1997	モーツァルト劇場1997年5月例会
Missa c-moll KV427 (417a)	武本 浩	高橋 照美 (S) 後藤 ちしる (S) 五郎 俊朗 (T) 黒田 博 (B)	小樽 由布子	大場 恭子、渡辺 有里香 和泉 純子、大井 道子 三宮 美穂、福山 美由希 鈴木 准、高田 正人 瀧井 崇、杉山 範雄	神戸・六甲カトリック教会	30.Mai 1999	モーツァルト劇場1999年5月例会 大阪モーツァルトアンサンブル 第30回定期演奏会
Requiem d-moll KV626	今村 雅俊	林 裕美子 (S) 向井 順子 (A) 山下 文裕 (T) 井上 敬典 (B)	小樽 由布子	姫路CGS合唱団	大阪・大阪カテドラル聖マリア大聖堂	5.Dezember 1991	モーツァルト没後200年追悼ミサ
Requiem d-moll KV626	宮本 佳計	宮本 由里子 (S) 阿本 明美 (A) 中塚 昌昭 (T) 藤村 匡人 (B)	紺谷 昌子	混声合唱団アンサンブル・マチナー	長岡京・京都府長岡京記念文化会館	26.November 2006	混声合唱団アンサンブル・マチナー 第10回定期演奏会
Requiem d-moll KV626	武本 浩	北浦 聡子 (S) 百々 玲子 (S) 鈴木 綾 (A) 龍上 さくら (A) 北浦 啓 (T) 山崎 大輔 (T) 稲生 啓行 (B)	桑山 彩子	混声合唱団CADENZA	豊中・豊中市立アーク文化ホール	30.Juni 2007	大阪モーツァルトアンサンブル 第45回定期演奏会
Litaniae Lauretanae B.M.V. B-Dur KV109 (74e)							
Litaniae de Venerabili altaris Sacramento B-Dur KV125							
Litaniae Lauretanae B.M.V. D-Dur KV195 (186d)							
Dixit et Magificat C-Dur KV193 (186g)							
Litaniae de Venerabili altaris Sacramento Es-Dur KV243	今村 雅俊	尾崎 比佐子 (S) 向井 順子 (A) 畑 儀文 (T) 井上 敬典 (B)	三木 麻帆	セレスナ合唱団	姫路・バルナツホール	11.Dezember 2005	セレスナ合唱団創立50周年記念演奏会
Vesperae solennes de Dominica C-Dur KV321							
Vesperae Solennes de confessore C-Dur KV339	今村 雅俊	林 裕美子 (S) 向井 順子 (A) 山下 文裕 (T) 井上 敬典 (B)	小樽 由布子	姫路CGS合唱団	姫路・バルナツホール	11.Februar 1990	第5回CGS・ポイントコンサート